

# 中京大学図書館所蔵源氏物語（五冊本） 翻刻 若菜下

藤井 日出子

## 凡例

一、本稿は、中京大学図書館所蔵源氏物語「若菜上・

下・橋姫・総角・早蕨」（略称「中京大本」、室町

末期写五卷五冊。天理図書館蔵の別本系の麦生本や

阿里莫本と同系統の本文）の内の若菜下を翻刻した

ものである。「中京大本」の解題については、「中京

大学図書館蔵国書善本解題」（『中京大学図書館』）

を参照願いたい。

一、諸本との本文異同が対照できるように、『源氏物

語大成』のページ数を（1125）のように、翻刻本文

中に入れた。

一、翻刻本文には丁数・表裏を」（1オ）のように、  
その丁末の文字の後に入れた。

一、阿里莫本（麦生本は若菜下巻は欠巻）の校異は、  
漢字、仮名、仮名遣い、宛字などの相違はこれを無  
視した。

一、中京大本については、用字を通行の字体にした以  
外はすべて原本通り（誤字・脱字・衍字もそのま  
ま）とし、虫損、破損、汚損は□内に判読可能の文  
字を記し、不明の場合そのままとする。勘物・合点  
も原本通り、朱点はそのむねを記し、異本注記もそ  
のままイとした。

一、見せ消ち文字は、その左横に「印」、右に訂正文字

を傍書し、補入記号は○印とし、その右に文字を傍書する。なお見せ消し記号、補入記号のないものはそのまま傍書する。重ね書きは、上に書かれた文字を本文とし、下に書かれた文字は右横に×印して示し、下の文字が不明の場合はそのまま△とする。削除された文字は、■のように字数文だけあけ、下の文字は右に×印して傍書し、不明の場合は▲▲とする。なお校異欄には、中京大本の訂正後の文字が阿里莫本と一致する場合は、原則として掲げなかった。

一、和歌は原本通り二字下げとし、そのまま本文に続けた。

### 追補

なお①などの通し番号を、若菜下巻以降は行数番号に改める。御指摘いただきました、樋口芳麻呂氏には心より感謝申しあげます。

## 若菜 下

(1125) ことはりとは思なからうれたくもいひたる  
かないてやなそやことなる事なきあへしらひはかりを  
なくさめにてはいか、すくさんとか、る人つてならて  
一ことをもの給ひきこゆるおりありなんやとおもふに  
つけて大かたに<sup>×つけ</sup>■<sup>×つけ</sup>ては<sup>お×か</sup>■<sup>×こ</sup>くめてたしと思聞ゆ  
るか院の御ためすこしなまゆかむ心やつきにけんつ  
こもりの日は人くあまたま入給へりなま物うくそ、  
ろはしけれとそのあたりの花の色をも見てやなくさむ  
と思てま入給殿上のり弓<sup>×小</sup>二月のほとにとありしをすき  
て三月はた御き月なれはくちおしう人くおもふに此  
院にちかく御まとひあるへしとき、つたへてれい」(1

⑤大かたに<sup>×つけ</sup>■<sup>×つけ</sup>ては<sup>お×か</sup>■<sup>×こ</sup>く「かしこく」の「か」「こ」削  
除し「お」補入中「大方につけてはかしこく阿⑦あまたま入給  
へり」あまたま入給へる阿⑧花の色をも「花の色をも阿⑨殿上  
のり弓」殿上の小弓阿⑨ほとにとありしを「ほとにありしを阿

ウ)の左右大將さる御中らひにてま入給へればすけなといとみかはしてこゆみなとの給をすくれたるかちゆみの上すともめしいて、つかうまつらせ給殿上の人くもつきくしきかきりはみなまへしりへの心をつけてみなかたわかれゆくま、にけふにとちむる霞の気しきもあはた、しくみたる、ゆふ風に花のかけいと、たつことやすからて人くいたくゑいすき給てえもいはぬかけ物ともこなたかなたの人の御心とも見えぬへきを柳のはをもも、たひいあてつへきとねりともものうけはりて(1126)いとむらんなりやすこしこ、しきてつかひをこそいとませめとて大將たちより(2オ)はしめてくたし給衛門督人よりけにた、なかめのみしつ、物し給へはかのかたはし心しれる御めには見つけつ、なをけしきことなりわつらはしき事いてくへきにやとわれさ

⑤けふにとちむるけふにとかむる阿 ⑥たつことやすからて  
「たつ」右肩朱合点中「たつことやすからす阿 ⑧かけ物と  
も「物」見せ消ちとしたが、墨汚れかとも見える中「かけと  
も阿 ⑧人の御心とも一人御心とも阿

へ思つきぬる心ちす此きみと御なかいとよしさるなからひとといふ中にも心かはしてねんころなれははかなき事につけても物おもはしくうちなけくことあらむはいとおしくおもほえ給みつからもおと、を見奉るもけおそろしくまはゆくか、る心はえあるへひ物かはなのめならむわたりにてたに人ににくまるへからんふるまひはせしと思物をまいておほけなきこと、思わつらひてはかのありしねこをたにえてしかな思」(2ウ)事かたらふへくもあらねとかたはらさひしきなくさめにもなつけんとおもふにも物くるをしういかてかさはぬすみいてんとそれさへそかたき事なりける女御の御かたにま入給て物かたりなと聞えまきはし心みるいとおくふかく心はつかしけなる御もてなしにてまほに見え給こともなきにか、る御なからひにたにけとをくなら

①さるなからひとさるならひと阿 ③事につけてもにつけても阿 ⑦せしと思物をせしと思を阿 ⑧えてしかなえてしかなと阿 ⑬心はつかしけなる心はつかしけなり阿

ひたるをゆくりかにあやしくありしさまなりとさすかにうちおほゆれとおほろ(1127)けにしめたるわか心からあさくも思なされす東宮にに給てろなうかよひ給へる所あらんかしとめと、めて見奉り給ににほひやかになとはあらぬ御かたちなれと」(3才)さはかりの御ありさまはいとことにてあてになまめかしくおはしませは内の御ねこのあまたひきつれたりけるをはらからともの所くにあかれてこの宮にもありけるかいとおかしけにてありくを見るにもまつ思いてらるれば六条院のひめ宮の御かたに侍るねこそいと見えぬやうなるかほしておかしく侍しかはつかにぞ見給へしといし給へはねこわさたらうたうし給御心にてくはしくとひ聞え給からねこのむらこにかたかけたるさましてなむ侍しおなしやうなる物なれと心うつくしく人なれ

②わか心から―我心かは阿 ④にほひやかになとはあらぬ―にほひやかになとけあらぬ阿 ⑨六条院のひめ宮の御かたに侍る―六条の岩もることはかひめ宮の御かたに侍阿 ⑬からねこの―かうねこの阿 ⑭人なれたるは―なれたるは阿

たるはあやしくなつかしき物になん侍るなとゆかしう」(3才)おもほすへく聞えなし給きこしめしをきてその、ちきりつほの御かたよりつたへて聞え給ければまいらせ給けにいとうつくしけなるねこなりけりと人くけうするをゑもんかみはたつねんとおほひたりきと御氣しを見をひてひころへてま入給へりわらはよりす尺院にわきておもほしたりし君なれば御山こもりにをくれ奉り給ては此宮にそしたしく(1128)ま入心よせ聞えたる御ことなとをしへ聞え給とて御ねこあまたつとひそひにけりいつら此見し人はとたつねて見つけ給へりいとらうたくおほえてかきなて、いたり宮もけにおかしきさましたりけり心なむまたなつ(4才)きかたきはみなれぬ人をするにやあらんこ、なる猫ともをとらすかしのたまへはこれはさるわきまへ心もお

①侍るなと―侍なと阿 ②おもほすへく―おほすへく阿 ⑥御氣しを―御氣しき阿 ⑦おもほしたりし―おほしたりし阿 ⑧ま入心よせ聞えたる―心よせ聞えたり阿 ⑨聞え給とて―聞給とて阿

さく侍らぬ物なれとその中にも心かしこきはをのつ  
からたましひ侍らんかしなと聞えてまさるともさふら  
うめるをこれはしはし給はりてあつかり侍らんと申給  
心のうちにはあなちをこかましくおほゆつゐにこ  
れをたつねとりてよるもこれをあたりちかくふせ給あ  
けたてはそのかしつきをしてなてやしなひ給人けとを  
かりし心もいとよくなれてともすれはきぬのすそなど  
にまつはれきつゝむすふるもまめやかにうつくしとお  
もふいとなかめてはしちかうよりふし給へるにきて」  
(4ウ) ねうくといとらうたけになけはかきなて、  
うたてもすむかなとほゝゑみて

恋わふる人のかたみとてならさはなれよなにとて  
鳴ねなるらんこれもむかしのちきりにやとかほを見つ  
ゝの給へはいよくらうたけになくをふところに(11

②さふらうめるをこれはしはし給はりてさふらうめるをこれ  
はしはし給て阿 ⑪うたてもすむかなとうたてもすゝむるか  
なと阿

29) いれてなかめる給へりこたちなとはあやしくには  
かなるねこのときめきかなかやうの物見いれ給はぬ御  
心にと<sup>か</sup>めと<sup>ヒヒヒヒ</sup>まりけり宮よりめすにもまいらせすと  
りとゝめてこれをかたらひ給<sup>左</sup>大将殿の北方は大殿  
のきんたちよりも右大将君にはなをむかしのまゝにう  
とからす思聞え給へり心はえのかとくしさけち(5  
オ) かくおはするきみにてたいめし給おりく思へた  
てたるけしきなくなるともてなし給へれば大将もしけひ  
さなどのことくくしをよひなき御さまのあまりなる  
にさまことなる御むつひにて思かはし給へり男君いま  
はまいてかのはしめの北方をもてはなれはて給てなら  
ひなくもてかしつき給この御はゝに男君のかきりなれ  
はさうくしとてかの真木はしらのひめ君をえてかし  
つかまほしくし給へとおほち宮なとさらにゆるし給は  
②御心にと<sup>か</sup>めと<sup>ヒヒヒヒ</sup>まりけり「か」朱補入、「とまり」朱見  
せ消ち中御心にとめと、まりけり阿 ③とりとゝめてとゝ  
めて阿 ④<sup>左</sup>大将殿のー大将殿の阿 ⑧けしきなくなるともてなし給  
へれば大将もしけひさなとのーけしきなとの阿 ⑫この御はゝ  
にーこの御はらに阿

す此君をたに人わらはれならぬさまにて見んとおも  
ほしの給にこの御おほえいとやんことなくて内にもこ  
の宮の御かたさまの心よせもこよなくて」(5ウ) 此  
事とそうし給事をえそむき給はす心くるしき物に思聞  
え給へり大かたいまめかしうおはする宮にて此院と大  
殿につき奉りては人も(1130) まいりつかうまつり世  
におもくおほえ給へり大將もさる世のおもしとなり給  
へきしたかたなれはひみ君の御おほえなとてかはなく  
はあらん聞えいつる人くゝるひにふれておほかれとお  
ほしさためすゑもんのかみをそさもけしきはまはとお  
ほすへかめれとねこにはおもひをとひ給てやさも思よ  
らぬはくちおしかりけるは、君のひかめる人にてよの  
つねのありさまにけちたるもくちをしき物におほして  
ま、母の御あたりをは心」(6オ) つけてゆかしくお

もふいまめひたる心さまにそ物し給ける兵部卿宮なを  
一所のみおはして御心につきておほし、事ともみなた  
かひ世の中すさましくおもほさるゝにさてのみやはあ  
まへてすくさんなどおほしてこのわたりにけしきはみ  
より給へれはおほ<sup>×</sup>宮もなにかはかしつかんと思はん  
女子をは宮つかへにつきてきてはみこたちにこそは見  
せ奉らめたゝ人のすくよかになをくゝしきをのみいま  
の世の人のかしこうするしなゝきわさなりやとの給て  
いたくもなやまし奉らてうけひき給つみこあまりうら  
みところなくさうくゝしとおほす大」(6ウ) かたの  
あなつりにくきあたりなれは(1131) えしもいひすく  
ひ給はておはしましそめぬいになくかしつき聞え給  
おほ宮は女子のあまた物し給てさまくゝに物なけかし  
きおりくゝおほかるにも物こりしぬへけれとなをこの

②おほし、事ともーおほし、事も阿 ⑤おほ<sup>×</sup>宮もーおほち宮  
も阿 ⑥つきてきてはー「きて」朱見せ消ち中ーつきては阿 ⑬  
おほ宮はーおほち君は阿

君のこの思はなちかたくあはれにおほえてなん母君  
はあやしきひか物に年ころにそへてなりまさり給大将  
はわかことにしたかはすとおろかに見すてらるめれ  
はいとなん心くるしきとて御しつらひをもみつからゐ  
たち御らんしいれよろつにかたしけなく御心にいれ給  
へり宮はうせ給へりける北方をよと、もに恋聞え給て  
た、かの御ありさまにたらん人を見んなどおほしの  
給にあしうは」(7オ) あらねとさまかはりてそ物し  
給ひけるとおほすやくちおしかりけんかよひ給さま  
いと物うけなり宮なけき給ふ心つきなきわさかなとおほ  
し母君さこそひかみ給つれとうつし心つくおりはくち  
おしくうき事に思はて給大将もされはよいといたくい  
ろめき給へるみこそとはしめよりわか御心にゆるし給  
はさりしことなれば物しと思給へりかんの君もかくた

②なりまさり給―成まさり阿 ⑬されはよ―されはよと阿

のもしけなき御ありさまをちかくき、給てさやう世の  
中を見ましかはこなたかなたわかすみ給はまし(1132)  
なとなまおかしくもあはれにも思いて給けりそのかみ  
もけちかく見奉らんとまでは思よらさりきかした、な  
さけくしう心ふかきさま」(7ウ) にの給をきしを  
あへなくあはつけき物にやき、をとひ給けんはつかし  
くとし比もおもほしわたることなればかゝるあたり  
にてき、かよひ給はんことも心つかひせらるへくおほ  
すこれよりもさるへきことはあつかひ聞え給せうとの  
君たちなとしてかゝるけしきをしらすかほにくから  
す聞えまとはしなとするに心くるしくてもてはなれた  
る御心はえなきにおほ北方といふさかな物そゆるしな  
く聞えたまへりける御子たちはのとやかにふた心なく  
て見給はんをこそそれをたにはなやかならぬなくさめ

①さやう世の中を―さやうなる世の中を阿 ⑨これよりも―是より阿

にはおもふへけれとむつかり給宮もき、給てはたいと  
 、き、ならはぬ」(8才) 事かなむかしいとあはれと  
 思し人を、きてもはかなき心のすさひ<sup>は</sup>。たへさりしを  
 かやうにきひしき物ゑんしはことになりし物をと心  
 つきなくむかしをしのひ聞え給つ、いとふるさとにう  
 ちなかめかちにおはしますさいひつ、も二とせはかり  
 になりぬれはかゝるかたにめなれてたゝさるかたの御  
 なからひにてすこし給はりなくすくるにとし月かさな  
 りゆくうちの御門御位に(1133)て十八年になり給に  
 けりつきにゐ給へき御子もおはせず物のほなき心ち  
 して世の中もはかなくおもほゆるを心やすく思人にも  
 たいめしわたくしさまにても心をや」(8ウ)りての  
 とかにすすさまほしくなととし比おほしわたり給ふに  
 なやみ給事さへありてにはかにおりさせ給ぬよ人あか

③心のすさひ<sup>は</sup>。たへさりしを一心のすさひはたえさりしを阿 ⑧  
 はりなくすくるに一わりなくすくるに阿 ⑪世の中一世中阿

すさかりなる御よをかく御心とのかれ給ことおしみな  
 け、と春宮もおとなひさせ給たれはうちつゝきて世中  
 のまつりことなとことにかはるけちめもなかりけり大  
 きおとゝもちしのへうを返し奉りてこもり給ぬ世中  
 のつねなきによりさかしきさかりの御門の君もかく御  
 位おり給ぬるにとしふかき身のかうふりをかけんはな  
 にのおしからんとおもほしの給に<sup>左</sup>。大将殿なん<sup>右</sup>。大臣に  
 成給てよの御うしろみはつかうまつり給けり女御君」  
 (9才)はかゝる御世をもまちつけ給はてうせ給にけ  
 れはかきりある位をえ給へれとも物のうしろの心ちし  
 てかひなかりけり六条院の女御の御はらの一宮春宮に  
 ゐ給ぬさるへき事とかねて思ひしかともさしあたりて  
 は猶めてたくもおとろかるゝわさなり右大将君大納言  
 にてれいの左にわたり給ふあらまほしき(1134)御な

①おしみなけ、と一おしみなけくと阿 ⑦<sup>左</sup>大将殿なん<sup>右</sup>。大臣に  
 一大将殿なん大臣に阿 ⑪六条院の女御の御はらの一六条院の  
 女御の御母阿



からひなり六条の御おと、はおりぬ給ぬるれいせいゐ  
んの御つきのおはしまさぬ事をあかす心中におほすお  
なしすちなれと思なやましき事ならてすくし給へるに  
つみはかくれてすゑの」(9ウ) 世まではつたふまし  
かりける御すくせ口惜さうくしとおほせと人にのた  
まはせぬことなれはいふせくのみなん東宮の女御は宮  
たちあまたかすそひ給ていと御おほえならひなし源氏  
のうちのつゝき后にぬ給へ事をよ人あかすおもへるに  
つけて冷泉院の後はゆへなくてあなかちにかくしをき  
給ける御心をおほすにいよく六条のおとゝを年月に  
そへてかきりなく思聞え給へり院の御門もおほし、や  
うにみゆき所せからてわたり給なとしつゝけにあらま  
ほしき御ありさまなりひめみやの御事を御門御心と」  
(10オ) とめて思聞え給へり大かたのよにもあまね

①六条の御おと、は一六条のおと、は阿 ③なやましき事ならて  
一なやましき事なくて阿 ⑤口惜くちおしく阿 ⑧うちのつゝ  
きうちつゝき阿 ⑧ぬ給へ事をぬ給ふへき事を阿 ⑬ひめみ  
やの姫君の阿 ⑭大かたのよにもおほかたの世にも阿

く思かしつかれ給へとたいの上の御いきをひにはえま  
さり給はす年月ふるまゝに御中いとうるはしくむつひ  
聞え給ていさゝかあかぬ事なくへたてもみえ給はぬ物  
からいまはかくおゝそらのすまひならてのとやかにお  
こなひをもとなんおもひこの世はかりにこそと(1135)  
おりく聞え給をあさましくつらき御事なりみつから  
ふかきほいある事もまりてさうくしく思給ある世  
にかはらん御ありさまのうしろめたさによりてこそか  
くなかふらふれつゐにその心とけ(10ウ)なむ後にと  
もかくも思なり給へとのみ聞え給女御君たゝこなたを  
のみまことの御おやにはもてなし聞え給て御方はか  
くれかの御うしろみにてひけし給へるしもそ中く  
ゆくゑたのもしうめてたかりける尼君いとゝやゝもす  
れはたへぬよろこひの涙ともすれはおちつゝめをさへ  
②年月ふる一年月ふる、阿 ④おゝそらの一おほそうの阿 ④お  
こなひをもとなんおもひ一おなひをもとなん思阿 ⑥おりく聞  
え給を一見はてつるよはひにもなりにけりとおりく聞え給を  
阿 ⑨なかふらふれ一なからふれ阿 ⑩思なり給へとのみ一思な  
り給へたのみ阿

のこひた、していのちなかきをうれしけなるためしにもなりて物し給すみよしの御くわんかつくはたし給宮の女御の御いのりまつしたまはんとてかの箱あけて御覧しけるにさま／＼のいかめしき事ともあ<sup>⑪オ</sup>りとしことの春秋のかくらにかならずなかきいのりをくはへたり願ともけにかゝる御いきをひならてははたし給へき事ともおもひをきてさりけりた、はし／＼かきたるおもむきさう／＼しくはかひなかるへしふかきを神ほとけもき、いれ給へきことのはあきらかな<sup>(1136)</sup>りいかてかはさる山ふしのひしり心にかゝる事もを思よりけんとははれにおほけなくも御覧すさるへきにてしは／＼かりそめにても身をやつしけるむかし<sup>⑪</sup>の世のおこなひ人などにやありけんなどおもほしめくらすにもかる／＼しくいと、<sup>(11ウ)</sup>おもほしな

①のこひた、してーのこひた、らして阿 ⑫しは／＼かりそめにてーしはしかりそめにて阿

されすこのたひはこのこゝろをあらはし給はて院の御まうてにて出たち給うらつたひの物さはかしかりしほと<sup>×</sup>のそこらの御願みなとし比はたしつくしたまへれともなを世になかくおはしましてかゝる色／＼のさかへを見給ふにつけても神の御たすけはわすれかたくてたいの上もそひてまふて給ひひきよのつねならすいみしくことゝも世のわつらひはふかんとし給へとかきりあれはめつらかに上達部大臣二所を、きてはみなつかうまつり給舞人たちはゑうのすけたちきよけにたけたちひ<sup>(12オ)</sup>としきをとゝのへてこのゑらひにいらぬをはいみしきうれへに思すき物ともありけりへいしうともはいはし水かもものりんしのまつりにめす人／＼のすちのことにすぐれたるかきりとゝのへさせ給へりけうくはゝりたるふたりなん近衛つかさのなた<sup>(1137)</sup>

かきかきりめしたりけるみかくらのかたには内東宮院  
の殿上人かた／＼にわかれて心よせつかうまつり給へ  
るかすもしらす色／＼につくしたる馬くら上達部の馬  
そひすいしんともつき／＼のことねりわらはなにくれ  
まてと、のへかさりたる見物又なきさま」(12ウ)なり  
うへ女御の君はひとつに奉りてつきの御車に明石の御  
方尼君いと忍てくしたりける女御の御めのとたちとも  
しりにのれりつき／＼の人うへの御方の五女御との、  
いつ、あかしの御あかれのみつめもあやにかさりたる  
さうそくありさまいへはさらなり尼君はおなくはお  
いのなみしはのふるはかりいと人めかしうてうちまうて  
させんと院はの給けれとこのたひは大方の御ひ、きに  
たちまし覽事かたはらいたしもし思やうならん世中ま  
て出たらはと御かたはいさめ」(13オ)給けるをのこり

①みかくらのーみくらの阿 ③馬くらー朱の見せ消ち中ー馬く  
ら阿 ④すいしんとも、ーすいしんとも阿 ⑧女御との、い  
つ、ー女御との、阿 ⑩さうそくありさまーさうそくあるさ  
ま阿 ⑬まで出たらはとーまちいてたらはと阿

のいのちうしろめたくかつ／＼物ゆかしかりしてした  
ひまいり給なりけりさるへきにてもとよりかくにほひ  
いて給御身ともよりいみしかりけるちきりあらはに  
思しらる、人の御ありさまなり十月中の十日なれば神  
のゐかきにはふくすも色かはりて松のした紅葉なども  
をとにのみ秋を(1138)きかぬかほなること／＼しきこ  
まもろこしのかくよりもあつまあそひのかはりさまに  
み、なれたるはなつかしくおもしろく波のこゑにひ、  
きあひてさる木たかき松かせをふきたてたる」(13ウ)  
は笛の音もほかにてきくしらへにはかはり身にしむま  
てみ、も心もうちはあはせたるはうしもつ、みをはなれ  
てと、のへたるかおとろ／＼しからぬそなまめかしく  
すこく所からはまして聞えける山あひにすれる竹のふ  
しは松のみとりに見えまかひかさしの花の色／＼

④神のゐかきにー「神」右肩朱合点中 ⑥秋をきかぬ「秋」右  
肩朱合点中 ⑥かはなるーかはなり阿 ⑦かはりさまにー有さま  
に阿

は秋の草にことなるけちめわかれつ、何事にもめまかひいろもとめこはへるこゑにわかやかなる上達部はかたぬきており給にほひもなくくろくて上のきぬにはすわうかさねゑひそめの袖をにはかに」(14才) ひきほころはしたるにくれなゐのふかきあこめたものうち時雨たるに気しきはかりぬれたる松はらをわすれてもみちのちるに思わたさるみるかいおほかるかたちとにも萩のいとしろくかれたるをたをやかにさしてた、ひとかへりまひて入ぬるはいとあかすおもしろくそみえけるおと、むかしの事おほしいてられなからしつみ給しよのありさまはめのまへのやうにおもほさるゝにそのよの事もうちみたれてかたりいて給へき人(1139)もなければちしのおと、をそこひ聞え」(14才) 給ける入給てかの車に

①わかれつ、ーわかれす阿 ①めまかひーめのみまかひ阿 ②もとめこはへるー「もと」右肩朱合点中ーもとめこはつる阿 ⑤あこめーあこめの阿 ⑤うち時雨たるにーうち時雨に阿 ⑧萩のー「萩」右肩朱合点中 ⑧たをやかにさしてーたをやかにさして阿

たれか又心をしりて住吉の神代をへたる松にと、ふ御た、ふかみにかきたまへり尼君うちしほれたりか、る世をみるにつけてもかのうらにていまはとわかれ給しほと女御の君おはせしありさまなどおもひいつるにもいとかたしけなかりけるみのすくせのほとをそむきし人も恋しくさま／＼物かなしき事ともかつはゆ、しくこといみして

住の江をいけるかひあるなきさとはとしふる」(15才) あまもけふやしる覧をそくはひんなからんとた、おもひけるまゝに

むかしこそまつわすられね住吉の神のしるしを見るにつけてもとひとりこちけり夜一夜あそひあかし給廿日の月はるかにすみて海のおもておもしろくみえわたるに霜いとうちたくをきて松原も色まかひわたれる

⑭うちたくをきてーこちたくをきて阿

によろつの事そゝろさむくあはれもたちそひたりたい  
 のうへとしころのつねのかきねのうちながら時くにつけてこそけふある朝夕のあそひにみゝふれめなれ」  
 (15ウ) 給つ (1140) れ御門よりほかの御ありきをは  
 またならひたまはねはめつらかにおかしくおもほさる  
 住吉の松に夜ふかくをく霜は神のかけたるゆふか  
 つらかもたかむらの朝臣のひらの山さへといひける雪  
 のあしたをおもほしやれはまつ心かけ給しるしやとい  
 よくたのもしくなん女御君

神人の手にとりもてるさか木葉にゆふかけそふる  
 ふかきよの霜中務君

はふりこかゆふうちはらひをく霜はけにいち」  
 (16才)しるき神のしるしかつれくなくつきくかす  
 にしらすおほかりけんをなにせんにかはかきをかにか  
 ②つねのかきねのつねのかきねの阿 ④御門より「御門」  
 左肩朱合点中 ⑦ひらの山さへと「ひら」右肩朱合点中 ⑦雪  
 のあしたを霜のあしたを阿 ⑫けにいちしるきけちいちし  
 るき阿 ⑬かすにしらすかすもしらす阿

ゝるおりふしの歌は上すめき給おとこたちも中くい  
 てきえして松のちとせより外ははなれ出ていまめかし  
 き事なければうるさくてなんほのくと明行に霜はい  
 よくふかくてもとすゑもたとくしきまでゑひすゝ  
 みたるかたちかくらおもてともののかかほをはしら  
 ておもしろき事に心はしみて庭火もかけしめりたるに  
 なんまんさひくとさかきをくり返しくのり」  
 (16ウ)きこゆる御よのすゑおもひやらるゝそい(1141)  
 とゝしきよろつの事あかすおもしろきまゝにちよを一  
 夜になさまほしきよにもあかてあけぬれはかへる浪に  
 きをふもくちおしくわかき人くはおもほす松原には  
 るくとたてつゝけたる御車とも風にうちなひくした  
 すたれのひまくもときはのかけに花のにしきをひき  
 侍るとみゆるにうへのきぬの色くけちめをきつ、お

①上すめき給上すめき阿 ①いてきえしていてきゝして阿  
 ⑦まんさひくと「まん」右肩朱合点中さひくと阿 ⑨  
 ちよを一夜に「ちよ」右肩朱合点中 ⑩よにもよしも阿  
 ⑬ときはのかけに花のにしきをひき侍るとナシ阿

しきとりつき物まいりわたすをそしも人などはめにつきておもへるかしま君のまへにもせんかうのをしき」(17才) あをにひのおもてを<sup>う</sup>してさうしの物をまいるめさましき女のすくせかなとをのかとちはしりうこちけりまうて給しみちはことくしくてわつらはしき<sup>かんたから</sup>をことおほえかたくさまく<sup>△</sup>所せけなりしをかへさはよろつのせうゑうのかきりつくし給い、つくるにもうるさくむつかしき事ともなれはかゝる御ありさまをもかの入道きかすみぬよにかけはなれ給へるなんありかたき事なりかしましらはましもみくるしとや世の中の人これをためしにして心たかうなりぬへきころな」(17ウ) めりよろつの事につけて明石のあま君くとそめてあさえよのことくさにいひけるかのちしの大殿、あふみの君はすくろく(1142) うつ時のことはに③おもてをして「し」は「ら」とも見え「うら」と読ませて傍書「うい」としたか中一おもてをして阿③さうしのさうゑの阿⑤ことくしくて「ことくしくも阿⑥をことおほえかたく朱の見せ消ち中一をことおほえかたく阿⑧事ともなれは「事ともなれ阿⑪ためしにして「ためしにて阿⑬めてあさえ一めてあさえ阿

も明石の尼君くとそさいはこひける入道の御門は御おこなひをいみしうし給て内の御事をも聞いれ給はす春秋の行幸はかりになんむかしおもほしいつる事もましりけるひめ宮の御事をそなをよろつおもほしはなたてかの院をは大方の御うしろみにたのみ聞え給てうちく<sup>△</sup>の御心よせのあるへくそうせさせ給二品に成給てみふなともまさる」(18才) いよくはなやかに御いきをひまさるたいのうへかくて年月にそへてかたくにまさり給御おほえに心にわか身はた、ひとところの御もてなしにて人にはをとらぬにあまりとしつもりなはその御心はえもつゐにおとろへなんさらぬ世を見はてぬさきに心とよをそむきにしかなとたゆみなくおほしわたれとおよすけたらぬやうにてはか<sup>△</sup>くしくもえ聞えたまはす内の御門さへかく御心よせことに心くる⑬およつけたらぬやうにて「をよつけたらんやうに阿⑬はかくしくもさか<sup>△</sup>くしくも阿

しくて聞えたまへはおろかにきかれ奉りたまはんもいとおしくてわたりたまやう／＼ひとしき」(18ウ)やうに成行さるへきことはりとはおもひながらされはよとのみやすからすおもほしなれとなをつれなくおなしさまにてのみすこし給東宮の御さしつきの女一宮とりわきてこなたにかしつき聞えたまふその御あつかひになんつれ／＼なる御よかれ(1143)のほとをもなくさめ給けるいづれもわかすうつくしくかなしと思聞えたまへり夏の御かたはかくとり／＼なる御むまこあつかひをうらやみて大将君の御子内侍のすけのはらなるをそせちにむかへとりてかしつき給いとうつくしけにて心はえもほと」(19オ)よりははされておよすけたりおと、の君もらうたかり聞え給すくなき御つきとおもほししかともすへにひろこりてこなたかなたいとおほく

②わたりたまゝわたり給ふ阿 ③ことはりとはゝことはりととは阿 ⑩御子内侍のすけのゝ「御子」朱の見せ消ち中ゝ御子内侍のすけの阿 ⑬らうたかりゝらうたり阿

なりそひ給ていまはたゝこのうつくしみあつかひをし給てそつれ／＼もなくさめ給右のおとゝのま入つかうまつり給ことはいにしへよりもまさりていまは北方もおとなひはてゝそのむかしの御かけ／＼しきすちは思ひはなれ給にやさるへきおりもわたりなとし給てたいのうへにも御たいめありてあらまほしく聞えかはし給けり姫宮のみそおなしさまにわかくおほとき」(19ウ)ておはします女御の君はいまはおほやけさまにおもひはなち聞え給て此宮をは心くるしうおさなからん御むすめのやうに思はつゝみ奉り給す尺院むけによちかく成ぬる心ちして物心ほそきをいまさらにこの世のかへり見せしと思侍れとたいめのいま一たひあらまほしきをもし恨のこりもこ(1144)そすれこと／＼しきさまならてわたりまいり給へく聞え給ければおとゝもけ

⑦姫宮のみそゝ姫君のみそ阿 ⑩思はつゝみゝ思はくくみ阿

にさるへき事なりかゝる御けしきなか覽にたにす、み  
まいり給へきをましてかくまち聞え給けるか心くるし  
き事とて」(20才) わたり給へき事おもほしまうけて  
つゐてなくすさまじきさまにてやはひわたり給へき  
とおほしめくらすなさまの事をかはせさせ奉るへき  
とおほしけりこのたひはたり給はむとしわかなゝとて  
うしてやなとおもほしてさまゝの御ほうふくの事い  
もひの御まうけのしつらひなにくれとさまことにかは  
れる事なれば人の御心しらいとも入つ、おほしめくら  
すいにしへもあそひのかたに御心いれさせ給へりしか  
はまい人かくにんなどのさためすぐれたるへくとゝの  
へさせ給」(20才) 右大将とのゝ御子ともふたり大との  
ゝ御子の内侍すけのはらの君くはえて三人またちいさ  
きに七よりかみのはみな殿上させ給兵部卿宮のわらは

⑥このたひはたり給はむ―このたひわたり給はむ 阿 ⑬またち  
いさきに―またちいさきも 阿 ⑭殿上させ給―殿上させさせ給 阿

そんわうすへてさるへき宮いへのこたちこましらひい  
て給て殿上人もかたちもよくおなしまひのすかたも心  
ことなるへきをさためてあまたのまひの事さためさせ  
給いみしかるへきたひの事とてみな人心よせし給てな  
んみな物のしの(1145)いとまなきころなりける宮はも  
とよりきんの御琴をなんならひ給けるまたいとわかく  
院の」(21才) 御てひきわかれ給ひにしかはおほつか  
なくおもほしてまいりたまはんつゐてにかの御琴のね  
なんきかまほしきさりともしんはかりはひきとり給つ  
覽いと氣はひことならんかしと内にも院の御まへにて  
手をつくしたまはんつゐてにま入てきく物にもかなと  
のたまはせけるをおとゝの君ちかつき給てさるへきつ  
ゐてゝにはをしへきこゆる事もあるをそのけはひけ  
にまさり給にたれと又きこしめし所あるへく物ふかき

①こたちこましらひ―こたちはましらひ 阿 ②まひのすかたも  
―まひのすかた 阿 ⑥またいとわかく―いとわかく 阿 ⑦ひき  
わかれ給ひにしかは―ひきわかれ給にしかは 阿 ⑫ちかつき給  
て―つき給て 阿



にしもをよひたまはぬを何心なくてま入給へ」(21ウ)  
覽つゝゐてにきこしめさんとゆるしなうゆかしからせ給  
ふらんはいとはしたなかるへき事なりといとおしくお  
もほしてこのころそ御心と、めてをしへ奉り給しらへ  
ことなる手ふたつみつおもしろき大くとももの四きに  
つけてかはるへきひ、きそらのさむさぬるさをと、の  
へいてつ、やん事なきことのかきりをととりたて、をし  
へたてまつり給に心もとなくおはしますやうなれとや  
うくその心をえ給かいとになう成給ひるはいと(11  
46) まも心あはた、しきありさまなれ」(22オ) はよ  
るくなんしつかにことの心をしめ奉るへきとてたい  
にもそのころは御いとま聞え給て明暮をしへ聞え奉り  
給女御君にもたいのうへにもきんはならはし給しかは  
このおりおりにおさくみ、なれぬてともひきいて  
③はしたなかるへき事なりとーはしたなかるへきなりと阿 ⑥  
そらのさむさー「そら」左肩朱合点中 ⑩ありさまなれはーあり  
さまなれ阿 ⑪しめ奉るへきとてーしつめ奉るへきとて阿 ⑭  
このおりおりにおさくみ、なれぬー後「おり」朱の見せ消  
中ーこのおりくにおさく見えなれぬ阿

給もゆかしくおほして女御もわざとありかたき御いと  
まをた、しはしと聞え給ていつ、きはかりにそ成給へ  
れは神わさなとにことつけておはしますなりけり十一  
月すくしてはまいり給へき御つかひうちしきりあれと  
か、るつゝゐてにとてかくおもしろきよなくの」(22  
ウ) 御あそひをうらやましくなとてわれにつたへ給は  
さりけんとつらく思聞え給冬の夜の月は人にたかひて  
めて給御心なれはおもしろき夜の雪のひかりにおりに  
あはせたるてともをさふらふ人の中にすこしこのかた  
ほのめきたるに御琴ともさまくひかせあそひなど  
し給としのくれつかたはたいなとはいそかしくてこな  
たかなたの御いとなみにをのつから御覧しいる、こと  
あれは春のうら、かならんゆふへなとにいかてこの御  
琴をきかなとのたまひわたるにとしも」(23オ) か

②成給へれはー成給へは阿 ⑨このかたほのめきたるにー此ほ  
のめきたるに阿

へりぬ院の御賀いかめしくおほや（1147）けよりせさせ給ふ事ともちたきにさしあひてはひんなくおもほされてほとへ給二月一日をさため給てかく人舞人などま入て御あそひたえすありたいのうへつねにゆかしく思聞え給へる御琴の音いかてかの人くのさうひはの音にあはせて女楽心みんたゝいまの物の上すこそさらにこのわたりの人くの御心しらいともまさらねははかくしくつたへとりたることはおさくなければもいかてか心しらぬ事はあらしとなん」（23ウ）おさなきほどに思しかはよにあひ物のしといふかきり又なたきいゑくさるへき人のつたへともほゆるきはのなんなかりしそのかみより又このころのわか人どものされよしめきすくすにはたあさくなりになへかめりきんはたましてまねふ人はさらにあらしなどのたまへは

①せさせ給ふ―せさせ給阿 ③二月一日を―二月廿日を阿 ⑥物の上す―物の上すとも阿 ⑦まさらねは―まさらね阿 ⑩思しかは―思しるは阿 ⑩なたき―名たかき阿 ⑪つたへともほゆる―つたへともをのこさす心みし中にいとふかうはつかしきかなとおもほゆる阿

なに心もなくうちゑみてうれしくかくゆるしたまふはかりになりけるをわれなからおもほす廿一二のほとに成給にけれとなをあやしくかたなりなるさましてきひわにほそくあへかにうつくしくみえ給」（24才）院にも見えたてまつりたまはてとしへにけるを（1148）ねひまさり給にけりと御覧すはかりようひなとくはへて見えたてまつりたまへなとことにふれてをしへ聞え給にけにかゝる御うしろみなくてはましていはけなくおはします御ありさまかくれさらましと人くも見たてまつるむつきの廿日はかりなればそらもおかしきほとに風ぬるく成てをまへの梅もさかりに成行こすゑの花の木ともみなけしきはみかすみわたれるに月たゝは御いそきちかく物さはかしからんにかき」（24ウ）あはせたまはんほととの御琴の音もしかくめきて人もいひ

②廿一二のほとに―廿二三のほとに阿 ⑬かきあはせたまはんほとのかき給はんほとの阿

なさんを此ころしつかなるほとに心みたまへとてしん  
てんへわたひ奉り給御ともにわれもくとうまうのほり  
て物ゆかしかりする人おほかりこなたにとをきをはゑ  
りと、めさせ給てうちねひたれとよしあるかきりゑり  
と、のへてさふらはせ給わらはへはかたちすくれたる  
四人あか色にさくらのかさみうす色のをり物のあこめ  
うきもんのうへのはかまかひねりはくれなゐにてもて  
なしことなるをめしいて」(25才) たり女御の御かた  
にも御しつらひともいと、あらたまれるころのくもり  
なきにをのくいとましうつくしたるよそひともあさ  
やかにになしわらは、あを色にすわうのかさみからあ  
やのうへのはかまあこめは山ふき(1149)なるからの  
きぬおなしさまにととのへたりあかしの御かたはこと  
くしからてこうはひふたりさくらふたりあをちのか

きりにてあこめもききすわううちめなとえならてきせ  
たまへり宮の御方にもかくつとひたまふへきとき、給  
てわらはへのすかたはかりはと、のへつくるはせ給へ  
り」(25ウ)あをにひやなき<sup>かみ</sup>ゑひそめなどのかさみこ  
とにこのましくめつらかにはあらねと大かたの御いき  
をひのめつらしくけたかき事はさはいへとならひなし  
ひさしの中のみさうしをはなちてこなたかなたみき丁  
はかりへたてにて中のまは院のおはしますへきをまし  
ありけふのひやうしあはせにはわらはへをめさんとて  
右大將殿の三郎<sup>×四</sup>かんの君の御はらのあに君さうのふゑ  
をふき給ふ左大將のたらう君よこ笛ふき給ふこのきん  
たちをめし給てすのこにさふらはせ給内には御」  
(26才)しとねともめして御こと、もまいれりひし給御  
琴ともうるはしきこんちのふくろともにいれたるをひ

④やなき<sup>かみ</sup>―やなき<sup>かみ</sup>阿

⑩右大將殿の三郎<sup>×四</sup>―右大將殿の四郎

きいて、あかしの御方にはひは紫上わこん女御君にさ  
うの御琴女三宮にはかくことくしくおとろくしき  
御琴はまたえひきしつめたまはすやとあやうくれないの  
てならし給へるをそしらへて奉り給さうの御琴はゆる  
うとなけれとなをか(1150)く物にあはするおりのし  
らへにかけつ、ことちのたちとみたる、物なりかくそ  
のしらへと、のふへきを女はえ(26ウ)はりしつめ  
しなを大将をこそめすへかめれこの笛ふきともまたい  
とおさなけにてはうしと、のへんたのみつよからすと  
わらひ給て大将君こなたにとめせはいつれもみなすて  
かたき御てしともなれは御くは、りて大将のき、たま  
はんにもなんなかるへくとおもほす女御はつねにうへ  
のきこしめすにも物にあはせつ、ひきならし給へれば  
うしろやすきをわこんいくはくならぬしらへなれとあ

⑪大将のー大将阿

とさたまりたる物ならて女のととりぬへき物なれば春  
のことの音はみな(27オ)かきあはする物の音をみ  
たる、所にやとなまいとおしくおもほす大将いといた  
う心けさうして御前などのことくしくうるはしき心  
みあらんよりもけふの心つかひはまさりておほえ給ひ  
ければよきなをしにかうにしみたる御そとも袖いよ  
くたきしめてひきつくるひてま入給ほと日くれにけ  
りゆへあるたそかれ時のそら花はこそのふる雪思いて  
られてえたもたはむはかりさきみたれたりゆるらかに  
うちふきたる風につけてもえならず(27ウ)にほひ  
たるみ(1151)すの内のにほひ梅のかにふきあはせてう  
くひすさそふつまにしつへきいみしきおと、の御あた  
りのにほひなりみすのしたよりさうの御琴のすそいて  
きたるかるくしきやうなれ共これ<sup>か</sup>をと、のへてし

⑥いよくーいたく阿 ⑪みすの内のーみすの日の阿 ⑪うく  
ひすー「うく」右肩朱合点中 ⑬いてきたるかなくしきーい  
てきたりかるくしき阿 ⑭これ<sup>か</sup>をーこれを阿

らへ心み給へこゝに又うとき人のいるへきにもあらぬ  
をとのたまへはのたまへはうちかしこまりてとゝのへ  
てしらへ心み給へこゝに又うとき人のいるへきにもあ  
らぬをとのたまへはうちかしこまりてとゝのへ給ほと  
のようないおゝくめやすくていちこちてうをかきあは  
(28才) せてひゝきのこゑにはちのをゝたてゝふかく  
もしらへやらてさふらひたまへはなをかきあはせはか  
りにてひとつはすさましかるゝととの給さらにけふ  
の御遊のさしいらへましらふはかりのてつかひなんお  
ほえす侍とけしきはみ給さもある事なれと女樂にはこ  
とませてなんにけにけるとつたへなんなこそおしけれ  
わらひ給しらへはてゝおかしきほとにかきあはせひき  
てまいらせ給つ此御まこの大夫たちのいとうつくしき  
殿あすかたにてふきあはせたる物のねよは」(28ウ)

②とのたまへはのたまへはゝゝとのたまへは「前」のたまへ  
は「墨書見せ消ち中」との給へは阿 ⑨さしいらへゝさしいら  
へに阿 ⑪つたへなんなこそおしけれゝつたへなうそおしけれ  
とて阿 ⑫ひきてまいらせ給つゝひきてまいらせつゝ、阿

けれとおひさき見えていみしくおかしけなり御琴とも  
のしらへともゝとゝのへはてゝかきあはせ給いつれと  
なき御中にひはゝすくれて上すめき神さひたるこゑつ  
きすみはてゝおもしろきこゆわこんに大将もみゝと  
ゝめ給へるになつかしくあひきやう(1152) つきたる  
つまをとにひきかへしたるねのしらへともものことつき  
ともめつらしくいまめきてさらにわさとある上すとも  
のおとろくしき物のねかきたてたるしらへてうしに  
もとをとらすにきわゝしうやまと琴にかゝる」(29才)  
てありけるときゝおとろかるふかき御らうのほとあら  
はに聞えおもしろきおとゝの御こゝちおちゐ給ていと  
ありかたく思聞え給さうの御琴は物のひまゝに心も  
となくもりいつる物のねからにてうつはしくなまめか  
しうのみきこゆきんはなをわかきかたなれとならひ給

⑦上すともものゝ上すとも阿 ⑨やまと琴にゝやまとことにも阿  
⑪おもしろきゝおもしろきに阿 ⑪おちゐ給てゝゐ給て阿 ⑬  
うつはしくゝうつくしく阿

さかりなれはたとくしからすいといふ物にひきあひていふになりける御琴のねかなと大将もき、おとろき給はうしとりてさうかし給院もときく御あふきうちならし給ふ御こゑむかしよりもおもしろくすこしふつゝかに物くしきまてましり」(29ウ) てきこゆ大將もこゑはすくれ給へる人にてよのしつかになるまさりまゝにいふかきるなくなつかしくなりまさるよの御あそひなり月も心もとなき比なれはとうろこなたかなたほのかなるほとにともさせ給へり宮の御かたをのそき給へは人よりはけにちいさくうつくしけにてたゝ御そのみある心ちすにほひやかなるかたはをくれてあてにおかしく二月十日はかりのあをやきのわつか(1153)にしたりそめやさしくこたれる心ちしてうくひすのはかせにもみたれぬへくあへかにみえ給さくらのほそ

なかに御くしはひた」(30オ) りみきよりこほれかゝりて柳のいとのさましたまへり御琴のふくろをたゝみてひきかへしたるほとにちいさくまはしませは中くさしやり給ほともなに心なくいとうつくしくみえ給これこそかきりなき御ありさまなめれとみゆるに女御の君は又にはひくはゝりておなしやうなる御なまめきすかたのもてなしけはひよしあり心にくきけはひしてよくさきこほれたる藤の花の夏にかゝりてかたはらならひなくおもほゆるあさはらけの心ちそし給へるさるはいとふくらかなるほとに成給ていとなやましう」(30ウ) おほえ給ければ御琴もをしやりてけうそくにより給へるさゝやかなよひかゝり給へる御けうそくはれいのほとなれはをよひたる心ちしてことさらにちいさくつくらはやとみえけるそいとあはれなるしをん色

① いといふ物にーいとう物に阿 ⑤ ましりてきこゆーまして聞ゆ阿 ⑥ しつかになるまさりまゝにーしつかになりまさるまゝに阿 ⑦ いふかきるなくーいふかきりなく阿 ⑬ うくひすのーうく」 右肩朱合点中

③ まはしませはーおはしませは阿

の御そに御くしのかゝりたるさまさはらかにほらく  
ときよらにほかけの御すかたよになくうつくしけなり  
紫の上はゑひそめにやあらん色こきこうちきすわうの  
ほそなかに御くしのたまれるほとゆるらかによきほと  
のなかさなる人のやうたいあらまほしくあたりほほひ  
みちたる心ちして花と」(31才) いはゝさくらにたと  
へてもなを物よりすぐれたる気はひとことに物し給(11  
54) ふかゝる御あたりともに明石はけおさるへきを又  
さしもあらずもてなどのなまめかしくそおほゆるやな  
きのおり物のほそなかもえきにやあらんうちきにもう  
すきにうす物のほそなかならずはかななるひきかけ  
給へりことさらにひけたれとけはひ思なしも心にく  
ゝあなつらはしからすこまのあをちをき給へりたゝ氣  
しきはかりひきかけてたをやかにつかひなしたるはち

①さはらかに―さはやかに阿 ⑤ほほひみちたる心ちして―に  
ほほみちたる心して阿 ⑦物し給ふ―物し給阿 ⑨もてなどの  
―もてなしなどの阿 ⑪うす物のほそなかならず―うす物の花  
やかならず阿

のもてなしねをきくよりも又ありかたくなつかしく  
て」(31ウ)五月まつ花たちはな花もみもくしてをしお  
りたらんかほにおもほゆこれもかれもうちとけたらぬ  
御けはひとをきゝ見給に大將はいとうちゆかしくお  
ほえてたいのうへの見しおりよりもねひまさり給つら  
んありさまいとゆかしきにしつ心もなし宮をはいます  
こしのすぐせをよはましかはわか物にても見たてまつ  
りてまし心のいとぬるきはくやくそ院はさやうにお  
もふけてたひくしりうことにももの給けるをねたくお  
ほえければすこし心や<sup>お</sup>き方に見え給御氣はひにあな  
すり聞え給とはなけ」(32才) れといとしも心はう  
こかさりけりこの御かたをは何事も思をよふへくもあ  
らすけと(1155)をくとしころすきぬれはいかてかたゝ  
御かたにも心よせあるさまにはみえたてまつらんと

①なつかしくて―なつかしうて阿 ③かほに―かほりに阿 ④  
おほえて―おもほえて阿 ⑧おもふけて―おもむけて阿 ⑨し  
りうことにも―しるうことにも阿 ⑩心や<sup>す</sup>き方に―心やすきか  
たに阿 ⑪心は―心阿 ⑭心よせあるさまには―心よせあるさ  
まに阿

はかりのくちおしくなけかしきなりけりあなちにお  
ほけなき心などはさらに物し給はすいとよくもておさ  
めたり夜ふけゆく気はひひや、なりふしまちの月わつ  
かにさしいてたり心もとなしや春のおほろ月夜よ秋の  
夜の月のあはれはた、かうやうの物のねにむしのこゑ  
よりあはせたるた、ならすこよなくひ」(32ウ)ひきそ  
ふる心ちすかしとのたまへは大将君秋のよのくまなき  
月にはよろつの物のと、こほりなくことさらにつくり  
あはせたるやうなるそらの気しき花の露も色くめう  
つろひ心うつりてかきりこそ侍れ春のそらのたとく  
しき霞のまよりおほろなる月のかけにしつかにふきあ  
はせたるやうにはいかてか笛のねなともすみのほり侍  
らん女ははるをあはれむといふことふるき人のいひを  
けるにさなん侍りけるなつかしく物の音と、のふる

③月わつかに一月はつかに阿 ④月夜よ秋の夜の月一月夜に秋  
の月阿 ⑥よりあはせたるよりよりあはせたり阿 ⑫いかてか  
いかて阿 ⑬女ははるを「女は」左肩朱合点中 ⑬いひをけ  
るにさなんいひをけるわさなん阿

事は春のゆふくれこそ」(33オ)ことに侍りけれと申  
給へはいな此さためいにしへより人のわきかねたる事  
をすゑのよにくたれる人の心えあきらめわくましき物  
のしらへにく、てこくの物は(1156)しもけにりちを  
はつきのものにしたるはさもありしかなどの給ていか  
にた、いまのいふそくとおほえたかきその人かの人  
の御まへなどにてもたひく心みさせ給にすぐれたる  
はかすすくなくなりになりめるをそのこのかみとおも  
える上すともえまねひと、めぬにやこのかたほのかな  
る女房たちの御中にひきませたらんにきははなるへ  
く」(33ウ)こそあらねとしころかくむもれてすくす  
み、なともすこしひかくしくなりたるにやあらん  
口おしうなんあやしう人のさへにはかなくとりする事  
も物のほへありてまさる所なるその御前の御あそひな

⑥おほえたかきおほえたるき阿 ⑧なりにたりめるをなり  
にたるめるを阿



とにひときさみにゑらはるゝ人／＼これかれいかにそ  
などの給大将それをなにとり申さぬと思給れとあらは  
ならぬ心のまゝにおよすけてやはとおもひ給ふにのほ  
りてのよをきゝあはせ侍らねはや衛門督のわこん兵部  
卿宮御ひわなとこそはこのころめつらしきためしには  
ひきいて侍れけにかたはら」(34才)なきをこよひうけ  
たまはる物のねともみなひとしくみゝのおとろき侍を  
なをかくわさとならぬ御遊ともかねておもひたゆみけ  
る心のさはくにや侍覧さうかなといとつかうまつりに  
くゝなんわこんはかのおとゝはかりこそかくおりにつ  
(1157) けてしらへなひかしたるねなと心にまかせて  
かきたて給へるはいとことに物し給ふをおさ／＼きは  
はなれぬ物に侍をいとかしこくとゝのひてこそとめて  
聞え給いとさことことしき物にはあらぬをわさとうる

②給れとー給ふれと阿 ④兵部卿宮ー兵部卿宮の阿 ⑭さこと  
ことしき物にーこと／＼しき物に阿

はしくもはんしなさるゝかなとてしたりかほにほゝゑ  
み給けにけしうはあらぬ弟」(34ウ)子ともなりひわ  
はしもこゝにくちいるゝこともしらぬをさこそいへま  
た物のけはひことなるふしおほえぬ所にてきゝはしめ  
たりし時めつらしき物のこゑかなとなんおもほえしか  
とそのおりより又こよなうまさりわたるをやとせめて  
われかしこにかこちなしたまへは女房なとはつきしろ  
うよろつの事みち／＼につけてならひまねはゝさへと  
いふ物いつれときはなうおもほえつゝわか心にあさく  
ならすあくかきりならひとらんはいとかたけれと何か  
はそのたとりふかき人いまのよにおさ／＼なければか  
たはしを」(35才)なたらかにまねひたらん人さるか  
たに心をやりてもありぬへきを琴なんなをわつらはし  
うてふれにくき物にはありけるまことにありのまゝ

④けはひことなるふしーけはひことふし阿 ⑦かこちなしたま  
へはーかたりなし給へは阿 ⑫まねひたらん人ーまねひたら  
ん阿

たとりたるむかしの人はてんちをなひかし鬼神をやは  
 かけよろつの物のねからにしたかひて (1158) かなし  
 みふかき物もよろこひにかならずかはりいやしくまつ  
 しき物もたかきにあらたまりてうちゆるひたるもゆる  
 さるゝたくひあまたありける此国にひきつたへはしめ  
 けるはしめつかたまでふかく此事に心えたる人おほく  
 の年をしらぬ国にてすこし身をなきになして (35才)  
 此事をまねはんとまとひてたにしる事はすくなくあり  
 けるけにしかあきらかにそらの月星をうこかし時なら  
 ぬ霜雪をふらせていかつちをさはかひたる事有てのち  
 はためしありけるかくかきりなき物にてそのまゝにな  
 らへる人もありかたく成行すゑのよなれはいつくの  
 そのかみのかたはらにかはあらんざるを此鬼神もみゝ  
 とゝめかたふきそめにし物なれはにやさまゝにまね

ひて思かなはぬたくひありけるのちこれをひく人よか  
 らすといひつゝ、けてうるさき事にこそあれきんのねを  
 はなれては (36才) 何事にかは又物のねをとゝのへ  
 らるゝはあらんけによろつの事おとろへるさまには成  
 行ひとりいてはなれ心をたてゝもろこしこまとまとひ  
 ありきおやこをわかれまとひありかん事は世中にひか  
 める物に成ぬへしなにな (1159) のめにて此道をか  
 よはしとるはかりのはしをしりをかざらんしらへひと  
 つにてをひきつくさんことたにもはかりもなき物なり  
 いはんやおほくのしらへわつらはしきこくの物おほか  
 るを心に入しさかりにはよきとありし身につたはりき  
 たるかきりのふといふ物をあまねく見あはせてのち  
 〱しと (36才) いふへき人もなくてなんこのみちな  
 らひしることなをあかりてのよの人にはあたるへくも

① てんちを―あめつちを阿 ① 鬼神を―「鬼神」左肩朱合点中  
 ② 物のねからに―「物の」左肩朱合点中 ③ かならずかはり―  
 かならずかはる阿 ④ たかきにあらたまりて―たかひにあらた  
 まりて阿 ⑭ さまゝに―「さ」朱見せ消ち中―さまゝに阿

④ 成行―成行は阿 ⑥ おやこをわかれ―おやをわかれ阿 ⑧ は  
 しをしりをかざらん―かたはしをしりをかざらん阿 ⑫ のち  
 〱のち〱は阿

あらしをやまいて此つきといひてはつたはるすゑもな  
しいとあはれになんなどの給へは大将もけにくちおし  
くはつかしとおもほすこのみこたちの御中に思やうに  
おひいてたまひ物し給は、そのよになんもしさまても  
なからへとまるやうあらはいくはくならぬてのかきり  
もと、めたてまつるへきに二の宮今よりけしきありて  
みえ給をなどのたまへは明石の君はいとおもた、しく  
なみたくみてき、あたまへり女御の君は」(37才)さ  
うの御ことはうへにゆつりきこえてよりふし給ぬれは  
あつまはおと、のおまへにまいりてけちかき御あそひ  
になりぬかつらきあそひ給はなやかにおもしろしおと  
、もをりかへしうたひ給こゑたとへんかたなくあひき  
やうつきてめてたし月やうくさしあかるま、に花の  
色(1160) かももてはやされてけにいと心にくきほと

⑪ かつらきー「かつ」右肩朱合点中

なりさうのことは女御の御つまをとはいとらうたけに  
なつかしうは、君の気はひくは、りて内のねふかくい  
みしうすみてきこえつるをこの御てつかひはまたさま  
かはりてゆるらかにおもしろくきく」(37ウ) 人た、  
ならすす、ろはしきまであひきやうつきりむの手など  
すへてさらにいとかとある御ことのねなりかへりこゑ  
にみなしらへかはりてりちのかきあはせともなつかし  
ういまめきたるにきむはこかのしらへあまたのてとも  
のなかに心と、めてかならすひき給へき五六のはら<sup>ち</sup>を  
いとおもしろくすましてひき給ふさらに<sup>かた</sup>。ほななら  
すいとよくすみてきこゆ春にも秋にもよろつの物にか  
よへるしらへにてかよはしわたしつ、ひき給こ、ろし  
らひをしへきこえ給さまたかへすいとよくわきまへ給  
へるをいとうつくしくおもた、しくおもひきこえ」

② 内のねーゆのね阿 ⑤ りむの手なとーりんの手なと阿 ⑧ こか  
のしらへー「こか」左肩朱合点中 ⑨ 五六のはら<sup>ち</sup>をー五六のは  
ちを阿 ⑩ さらに<sup>かた</sup>。ほならすーさらにかたほならす阿 ⑫ こ、  
ろしらひー心阿

(38才)給この君達のいとうつくしうふきたて、せちに  
心いれたるをらうたかり給てねふたくなりたにたむに  
こよひの遊はなかうはあらぬほとに侍るへくおもへる  
をとめかたき物のねともいづれとなきをき、わくほ  
とみ、とからぬたとくしさにい<sup>た</sup>くふけにけり心ち  
なきわさなりけりやとてさうのふゑふく君にかはらけ  
さし(1161)て御そぬきてかつけ給大將君には宮の御  
かたよりさかつきさし出て宮御さうそくくたりえな  
らてかつけ給大將殿の若君にはこなたよりほそなかは  
かまなとことくしく(38ウ)あらてみなけしきは  
かりにははし給おと、あやしのことや物のしともこそ  
まつ物めかし給へけれうれはしき事なりとの給に宮の  
おはしますみき丁のそはより御ふゑを奉るうちわらひ  
給ていみしきこまふゑなりけりとてすこしふきならし

③こよひの—今夜の阿 ⑤い<sup>た</sup>くふけにけり—いたくふけにけり  
阿 ⑥君に—君も阿

給にみなたち出給ほとに大將たちとまり給て御このも  
たまへる笛をとりておもしろくふきあはせたりいづれ  
もく御てをはなれぬ物のつたへくいとになくのみ  
あるにてそわか御さへのほとはおもほししられける大  
將はきんたちを御車にのせて月のすめるにまかて給み  
ち(39才)すからさうの琴のかはりていみしかりつ  
るねともみ、につきて恋しくおほゆわか御北方は宮の  
をしへ奉り給しかはいくはくの御心にもしめ給はすな  
に事もた、おいらかにうちおほとかなる人のにくから  
ぬさまにて(1162)こともあつかひつきくにいとま  
なくして物し給へきをかしき所もなくおもほえさすか  
にはらあしくて物ねたみなとうちし給へとあひきやう  
つきてをかしきさまにて物し給ける院はたいへわたり  
給ぬうへはとまり給て宮に御物かたりなときこえ給あ

②ふきあはせたり—ふきあはせたる阿 ③物の—物阿 ⑪物し  
給へき—物し給へは阿

かつきにそわたり給にけるに日た」(39ウ) かくなる  
まで御とのこもりたまへり宮の御琴のねはいとうるさ  
くなりになりないか、き、給と聞え給へははしめつか  
たほのかにあなたにでき、しはいかにそやありしをい  
とよくなり給にけりいかてかはかうことくしくをし  
へ聞え給けにこそときこえ給さかしおうなくおほつ  
かなからぬ物のしなりかし是かれにもかうわつらは  
しきいとまいるわさなれはさらにをしへ奉らぬを院に  
もうちにもきんはならひとり給ぬらんと給とき、し  
にいとおしくさはかりのことをこそはかうとりわき  
て」(40オ) 御うしろみにつけて給へるしにてと思  
をこしてなと聞え給ふつゐてにもむかしよつかぬ御ほ  
とをあつかひおもひしさまそのよにはいとまもなく心  
のとかならてとりわきをしへきこゆることもなくてつ

③き、給とーき、給つと阿 ⑥おうなくーおほなく阿 ⑧  
院にもー院とも阿 ⑩さはかりのことをこそはーさはかりのこ  
とをこそ阿 ⑪御うしろみにつけてー御うしろみにつけ阿 ⑪  
しるしにてとーしるしにやと阿

きく／＼にまきれすくしつ、いまちかきころとなりては  
わさともき、あつかぬ(1163) 琴のねのいとかしくく  
いてはえしたりしもめいほくありて大将のいたくかた  
ふきをとろきたりし氣しきなりしも思やうにうれしく  
こそありしかたと聞え給かやうのすちにも又いまはお  
とな／＼しきかたに宮た」(40ウ) ちのあつかひなど  
とりもちてし給さまもいたらぬことなくすへて何事に  
付てももとかしくたとく／＼しき事ましらすありかたき  
人の御ありさまなれはいとかうしもあまりくしぬる人  
は世になか、らすもあるをとゆ、しきまで思聞え給こ  
としは三十七にそなり給ける見奉り給そめし年月のこ  
ともあはれにおほし出たるつゐてにさるへき御いのり  
などはしはしはつねよりもつ、しみ給へ物さはかしき  
ことのみありて思いたらぬ事もあらんを御心にはおほ

②き、あつかぬーき、あつかはぬ阿 ⑦とりもちてーよりもち  
て阿

しめくらししておほきなること、もし給は、をのつから  
せさせてんとぞ」(41オ) うつの物し給はすなりにた  
るこそいとくちおしけれ大方にてうちたのむもかしこ  
かりし人をなどの給いみつからはおさなくより人にこ  
となる身にておひいて、今の世におほえもきえかたき  
たく(1164) ひすくなくなんありけるされと又よにす  
くれてかなしきめをみる事も人にかくすくれたりしか  
しまつはあはれと思へき人くさまくにつけてをく  
れとまる人のすへにもあかすかなしと思事おほくあち  
きなくさるましきことにつけてもあやしく物思はしき  
事心にあかすおほゆる身にてすきぬれはそれにかへて  
や思しほとよりはいま、ても」(41ウ) なからふるな  
らんとなん思しらる、君の御事はかの一ふしのわかれ  
よりあなたこなたの物おもひとて心みたり給はかりの

②せさせてんとそうつのーせさせてんこそうつの阿 ④の給い  
ーの給つ阿 ⑩物思はしき事ー思はしき事阿 ⑫いま、てもー  
いま、て阿 ⑬君の御事はー御事は阿 ⑭物おもひとてー物思  
ひとても阿

ことあらしとなん思ふ后といとましてつきくの人  
はんことなしといへとも女はかならずやすからぬ物  
おもひそふ物なりたかきましらひするにつけても心み  
たれ人にあらそふ思つねにたへぬもやすけなきをおや  
のまとのうちなからすくひたてまつることのやうなる  
心やすきかたは人にまさるすくせとおほしたるなりお  
もはさりしほとにこの宮のかくわたり物しておはする  
こそはなまくるしかるへけれとも」(42オ) それにつ  
けては御おほえをくはふる心あれとみつからのうへに  
ておほししらすやあらん物のこゝろもふかくしり給ぬ  
れはさりともとなんおもふと聞え給へはの給ふやうに  
はかなき身にはすきにたるよそのお(1165) ほえなか  
ら心にたえぬものなけかしさのみうちそふやさらはみ  
つからのいのりなりけりとてのこりおほけなるけはひ

①いとましてーいへとまして阿 ②やすらからぬーやすからぬ  
阿 ③そふ物なりーそふなり阿 ⑥おほしたるなりーおほえた  
るなり阿 ⑧それにつけてはーそれにつけてこそは阿

なつかしけなりまめやかにはいとゆくすゑすくなき心  
ちのみするをことしもかくてしらすかほにてすぐすは  
いとうしろめたくこそおほえ侍れさきくもきこゆる  
事いかて御ゆるしあらなんと」(42ウ) きえ給それは  
しもあるましき御事になんさてかけはなれ給なん世に  
のこりては何のかひかはあるへきかくて何ともなくて  
すぐる年月なれと明暮のへたてなきうれしさのみこそ  
ます事なくはおもほゆれなををつからおもふさまあ  
る心のほとを見はて給はんとときこえ給てれいのこと心  
やましくなみたくましき御気しきもいとあはれと見た  
てまつり給てよろつきこえまきはし給おほくはみね  
と人のありさまとりくにくちおしからぬかたく見  
しりゆくまゝに」(43オ) まことの心はせのおいらか  
におちい給へるかたこそいとかたき物なりけれとなん

②すぐすは―すぐす阿 ④きえ給―聞え給阿 ⑦年月なれと―  
月日なれと阿

思はてにたる大将の母君をおさなかりしほとにみそめ  
てやむことなくえさらぬすちには思しをつねになかよ  
からぬへたである心ちしてやみにしをいまおもへはい  
とおしくもくやしくも又わかあやまちにはあらさりけ  
りなと心ひとつになんおもひいへる(1166) うるはし  
うおもりにてその事あかぬかなとおもほゆる事もお  
ほえさりしたゝいとあまりみたれたる所なくすぐく  
しうすこしさかしとやいふへかりけん思ふには」(43  
ウ) たのもしくみるにはわつらはしかりし人さまにな  
ん中宮の御母宮す所なん又はまことにこゝろふかくな  
まめかしきためしにはまつおもひ出らるれとこと人見  
えにくゝくるしかりしか心ゆるひなくはつかしくてわ  
れも人もうちたゆみあさゆふにむつひをかはさんには  
いたくつくろひし所のありしをうちとけては見やをと

①思はてにたる―思はてわたる阿 ⑤おもひいへる―思いつる  
阿 ⑥おほえさりし―おほえさりしを阿

さるらの心そひなとしてあまりつくろひしほとにや  
かてへたゝりし中そかしされとその人からおもひし  
にも又なにてちてのちのあはくしくなりぬるなけき  
をいみしくし給へりし」(44才) かいとおしくことは  
りなりしかは中宮をかくさるへき御ちきりといひなか  
らとりたてよそのそしり人のうらみをもしらす心よせ  
奉るをかのよなからもみなをされぬらん今もむかしも  
なをさりなる心のすさひにいとおしくやしきことお  
ほくなんきし方の人の上をもすこしの給い(1167)て  
ゝうちの御かたのうしろみはわつらはしかるへきほと  
ならぬにあなつりそめて心やすき物におもひしをなを  
心のそこはみえすきはなくふかきところある人になん  
うはへは人からな」(44才) ひきおいらかにもてなし  
なからうちとけぬ氣しきたにこもりてそこはかとなく

④ いみしくーいみしう阿 ⑧ おほくなんーおほくなんと阿 ⑪  
おもひしをーおもほえしを阿

はつかしき所こそあれとの給へはいとようおもひしわ  
きてけり人はみねはしらぬを是はまほならねとをのつ  
からけしきみるおりくもあるにいとうちとけにくゝ  
わつらはしき氣しきにいてたとしへなきうらなさを  
見をとひ給らんとつゝましかれと女御はをのつから思  
ゆるすらんと思なしてなどの給さはかりめさましきと  
心をい給へりし人をいまかくみえかはしなとし給も女  
御のためのま心なるあまり」(45才) そかしとおほと  
かにありかたければ君こそはさすかにくまなきにはあ  
らぬ物から人よりことにしたかひいとようふたすちに  
心つかひはし給けれさらにこそはみれと御心さまにに  
たる人はなかりけると氣しきこそ物し給へとほゝゑ  
みての給宮のいとようひきとり給へりしよろこひ聞えん  
とてゆふつかたわたり給われに心をく人やあらんとも

① おもひしーおもほし阿 ⑤ 思ゆるすらんとー思ゆるすなんと  
阿 ⑦ 心をい給へりし人をー心をいたまつりし人を阿 ⑪ 心つ  
かひはー心つかひ阿 ⑪ 御心さまににたる人はなかりけるー御  
心さまににたる人はなかりけれ阿



おもひたゝすいといたうわかひてひとへに御ことに心をいれておもはすいまはいとま(1168)いたうゆるひ給て」(45ウ)うちやすませ給へかし物のしをは心ゆるはせてこそならふなれといとくるしかりつるひころのしるしありていとうしろやすくなり給にけりとて御琴ともしやりて御とのこもりぬたいにはれいのおはしまさぬよはよひぬし給て人／＼に物かたりせさせ給てき、給かくよのたとへにいひあつめたるむかし物かたりにもあたるおとこ色このみふた心ある人にかゝつらひたる女かやうなる事をいひあつめたれとつゐによるかたありてこそあめれあやしうきても」(46オ)すきぬへかめるありさまかなけにあのたへるやうに人よりことなるすくせもありける身ながら人のしのひかくあかぬ事にする物おもひはなれぬ身にてやみなん

②おもはすーおはす阿 ④いとくるしかりつるひころのしるしありていとーいと阿 ⑦き、給かくよのーき、給て世の阿 ⑩よるかたありてー「よる」右肩朱合点中 ⑫のたへるやうにーの給へるやうに阿

とすらんとあちきなくもありけるかなと思つゝ、けてうち御とのこもりぬあかつきかたよりむねをやみ給ける人／＼見奉りあつかひて御せうそこ聞えんときこゆれといとひんなき事とてせいし給ていみしくいたきをねんしてあかし給つ御身もぬるみて御心ちもあしけれど院もとみにわ」(46ウ)たり給はぬほとさなとも聞えす女御<sup>△</sup>の御かたより御せうそくあるにかくなやましくてなと聞え給へるにおとろきてあなたより聞え給へるにうちさはきてむねうちつふれていそき(1169)わたり給へるにおとろきていかなる御心ちそとてさくり給へるにいとあつくおはすれはきのふきこえ給し御つゝしみのすちななどのこと思あはせられ給ていとおそろしくおほさる御かゆなともこなたにそまいりすへたる御らんしもいれす日一日そひおはしてよろつに見奉り

④いみしくいたきをーいみしくいたき阿 ⑤御身もー「御身」右肩朱合点中 ⑥さなともーなとも阿 ⑬こなたにそーこなたにそ阿 ⑭日一日ー日ひとひそ阿

なけき給はかなき」(47才) 御くた物をたにいと物うくし給へはまいておきあかり給ことたへてひころへぬいかならんとおほしきはきて御すほうともはしめさせ給けんさともめしてかちまいらせ給その事となくいくるしくし給むねはときくおこりてわつらひ給事ひころへぬさまくの御つ、しみともかきりなけれとしるしもみえすおもしろと見れとおこたるけちめあるはたのもしきをいみしく心ほそくかなしと見たてまつり給ことくもおほしめされすなけかれて御賀のひ、きもしつまりぬ院よりかくわつ」(47ウ) らひ物し給よしきこしめしていとねんころに御とふらひたひくありおなしさまにて二月もすきぬいふかきりなくおほしきはきて所をかへ給て心みんとて二条院にわたしたてまつり給つ院のうちゆすりみちておもひなく此人うせ

- ① なけき給―なけに給阿 ⑧ 見たてまつり給―見奉りつ、阿  
 ⑪ たひくあり―たひく也阿 ⑫ 二月もすきぬ―「三」の第一画削除中―三月もすきぬ阿

給なは(1170) かならすよをそむき御ほいとけ給なんと大将君も心くるしく思あつかひ聞え給へは御すほうなともとりくにあつまりてそつかうまつり給いさ、か物おほえ給ひまにはきこゆる事をさも心うくとのみうらみきこえ給へとかきりにてわかれ聞え給はんよりも」(48才) めのまへにさまかはり給はんをあかすいみしくおほさるればむかしより身つからこそおもひわたる事なれととまり給てさうくしくおほえ給はんことのみ思すくしつ、さかさまにうちすてられ給てつゐにいみしきめを見るへき事とおほしまとはるれば宮の御かたなどにもたえてわたり給はす御琴とも、すさましくひきこめられたり院の内の人みなあるかきり二条院にのみつとひまいりてこの院にはひをうちけちたるやうにてた、女とちおはして人ひとりの御けひなり

- ① かならす―院もかならす阿 ⑭ 御けひ―御けはひ阿

けり」(48ウ) とみゆ女御君もわたり給てもろともに  
みたてまつりなけき給た、にもおはしまさて御物のけ  
もおそろしきをはやうわたり給ねとくるしき御心ちに  
も聞え給ふわ(1171) か宮のいみしくうつくしくてお  
はするを見たてまつり給てもおとなひたまはんをえ見  
たてまつるましきにやあらんとわすれ給ひなんかしと  
のたまへは女御もせきあへすかなしとおもほひたりゆ  
ゝしくかくなおほしなけきそさりともしけしうはおはせ  
し心によりなん人はともかくもある事をのみとおきて  
か」(49オ) くひろきうつは物にはさいわひもそれに  
したかひせはき心ある人はさるへきにてたかき身とな  
りてゆたかにゆるへるかたはをくれてきうなる人はひ  
さしくつねならす心なたらかなるかうさまの人はみな  
なかきためしにのみなんありけるなとほとけ神にもこ

②御物のけもー御物のけとも阿

④聞え給ふー聞え給阿

の御心はせのありかたくつみかろき事そのさまを申あ  
きらめさせ給ちかくよひにも侍らぬみすほうのあさり  
たちもおほしさはく御けはひとをきくはいみしう心  
をおこしていのりきこゆよろしくひまありて」(49ウ)  
みえ給とき十日はかりうちませなとしつゝ又おもりわ  
つらひ給事いつとなくて月日をふるよるへ給はんを  
えよかるましく物し給なめりとおもほしなけく御物の  
けなといてくることもなしなやみ給さまそこはかとな  
くいみしとのみおほすに(1172) 心のいとまなけなり  
まことはゑもんのかみは中納言に成にきかし今の世に  
はいとゝしたしくおほされて身のおほえまさるにつけ  
ても思事のかなはぬうれはしさをおもひわひて此宮の  
御あね二宮をなんえ奉りけるけ」(50オ) らうの更衣  
はらにおはしましければなま心やすきかたましりて

②みすほうのーみすほう阿

④よろしくひまありてーひま有て

阿 ⑥ふるよるへーふる世さへ阿 ⑩まことはゑもんのかみ  
はーまことや衛門督は阿

思聞え給へり人からもなへての人に思なすらふれはけ  
はひこよなくおはすれともよりしみにしかたこそふ  
か、りければなくさめかたきおりはおはす。人めとか  
めらるましくもてなし聞え給てなをかの下の心はわす  
れはて給はて此しうといふかたらひ人は宮の御めのと  
のし、うのめのとのむすめなりけりそのめのとのあね  
はかんの君のめとなりければはやくよりけちかくき  
、給てまた宮のおさなくおはし」(50ウ) まし、おり  
よりいときよらになんおはします御門の御かしつき聞  
え給さまなとき、をひ奉てか、る思ひもつきそめたる  
なりけりかくて院もはなれおはしまいたるほと人すく  
なにしめやかならんほとのおりくををしはかりてこし  
うをむかへとりていみしくかたらふむかしよりかくい  
のちもたふましく思事をしたしきよすかありて思あり

③おはす。ー「おは」右肩朱合点中ーおはす阿 ⑤此しうといふ  
ーこち、うといふ阿 ⑥し、うのめのとのーナシ阿 ⑫こしう  
をー小侍従を阿

さまき、(1173) つたへ心のほとをもきこしめさせん  
たのもしきにそのしるしのなけはいみしくなんつら  
き院のうへこそかくあまたにかけ」(51オ) くしく  
て人にをされ給やうにひとり御とのこもるよなくお  
ほくつれくにてすくし給なりと人のそうしけるつい  
てにもすこしい給けしきにておなしくはた、人の心  
やすきうしろみをさたむるにはまめやかにつかうまつ  
るへき人をこそかたらふへかりけれとの給はせて女二  
宮の中くうしろやすくゆくすゑなかさまにて物し  
給こと、の給はせけるをつたへき、しにいとおしうも  
くちおしうもいか、思みたれさらんけにおなしすちと  
はたつね聞えしかとそれはそれとこそおほゆれはさ  
る」(51ウ) わさなりけりとうちうめき給へはこし、う  
いてあなおほけなそれをそれとさしをき奉り又いかて

①きこしめさせんーきこしめさせんと阿 ④御とのこもるー御  
とのこもり阿 ⑩いとおしうもくちおしうもーいとおしうも阿  
⑬こし、うーこしう阿 ⑭奉りー奉て阿

かくかきりなき御心なりけんといへはうちほゝゑみて  
さこそは物<sup>ヒ</sup>はありけれ宮にかたしけなく聞えさせを  
よひけるさま院にも内にもきこしめしたらんなどてか  
はさてもさふらはさらましとなんことのつゐてにの給  
はせけるにかけてもいてやたゝいますこしの御いたは  
りあらませはなといへはいとかたき事なりや御すくせ  
とかいふことの侍をのそひ（1174）て此院の事いて、  
ねんころに聞えたま」（52才）はん<sup>ヒ</sup>にたちならひさま  
たけ給はんおほえとやおほされし此ころこそはすこし  
物くしく御その色なともくろはみ給へれなといへは  
いといふかひなくはやりかなるくちこはさにえいひい  
て給はて今はよしすきにしことをは聞えしやたゝかく  
ありかたきひまにけちかきほとにて心中に思事すこし  
聞えさせつへうはかり給へおほけなき心はよし見給へ

②宮にかたしけなく―宮もかたしけなく阿

さらにおそろしければ思はなれて侍りとの給へはこれ  
よりおほけなき心は又いかてかあらんいとむくつけき  
事をもおほしけるかな何にまいり」（52ウ）きつらん  
とはちふけはいてあなきゝにくあまりこちたくこそ物  
をいひなひ給はめよはいとさためなき物を女御更衣も  
あるやうありて物し給ふたくひなくやはましてその御  
ありさまよおもへはいとめてたくてたくひなけれとう  
ちくは心やすきことのみおほさるらん院のあまたの  
御中にもたくひなきさまにもてなしならはし聞え給て  
さしも人しるましきかたくにたにましりめさましき  
事もありぬへくこそいとよくきゝ侍りや世中もいとつ  
ねなき物を人きはに思さためて」（53才）はしたなく  
ふつ（1175）きりなることなの給そこれはうしろやす  
くをしふるそとのたまへは人におとされ給御ありさま

⑫人きはに―一きはに阿

とてめてたきかたにあらため給へきやうやはあらんこれ  
はよのつねの御ありさまにもあらすた、御うしろみ  
なくてた、よはしくおはしまさんよりはおやさまにと  
ゆつり聞え給しかはかたみにさこそ思聞えかはし給め  
れあひなき御をとしめことになとはて／＼ははらたつ  
をよろつにいひこしらへてまことはさるよになき御あ  
りさまを見たてまつりなれた」(53ウ) まへる御なか  
らひにかすにもあらすあやしきなれすかたをうちとけ  
て御らんせんとはさらにおもひかけぬことなりた、一  
こと物こしにて聞えしらすはかりは何の御身のやつれ  
にかはあらん仏神にたにも思事申はつみあるわさのこ  
とかはとちかことをしての給へはしはしこそいとある  
ましきことにいひかへしけれ心ふか、らぬわか人は人  
のかく身にかへて思の給をえいなひはて、さりぬへき

③ おやさまにとーおやさまにも 阿 ⑩ 聞えしらすはかりはー聞  
えしらすはかりに 阿

ひまあらはいまたはかり侍らん院のおはしまさぬよは  
御丁のめぐりに人あまたさふらひてを」(54オ) まし  
のほにもさるへき人かならすさふらひたまへはいか  
なるおりをかはひまきる、ひまとはし侍らんといひつ  
、ま入ぬいかに／＼とつねにいひをこせ給にせめられ  
こ(1176) うしてさるへきおりをうか、ひつけてせう  
そこ聞えてつけたれはよろこひなからやつれしのひて  
おはしぬまことにわか心にもけしからぬ事なれはけ  
ちかくはうたておもひみたれまさるへきをさまては  
思をよはすた、一こと御そのつまをもみてあかすよと  
、もに思いてられ給御ありさま」(54ウ) をすこしけ  
ちかく見奉りおもふ事をも聞えしらせては一くたりの  
御返事見せ給てあはれとたにやおもほししとはかり  
そおもひける四月十日よひはかりなりけりみそきあす

② をましのーおまへの<sup>し</sup> 阿 ⑧ けちかくはーナシ 阿

とて齋院に奉り給女房十二人ことに上らうにはあらぬ  
わかい人／＼わらはへなりけりをのかし、物ぬいけさ  
うしつ、物見むなどおもひまうくるに人／＼いとまお  
しけにて御前のかたしめやかにて人めしけからぬおり  
なりけりちかうさふらうあせちの君も時／＼かよひ」

(55才) けりけん中将しのひて物いひにいてたるまに  
た、し、うはかりさふらひてやをらこの君を丁の東の  
かたのをましにすへつさまでもあるへきことなりや宮  
は何心なく御とのこもりにけるにちかく男のけはひし  
ければ院のおはしたるとおほしたるに(1177) うちか  
しこまりたる気しき見せてゆかのしたにいたきおろし  
奉るに物におそはる、とせめて見あげ給つればあらぬ  
人なりけりあやしき、しらぬこと、もをそきこゆる  
やあさましくむくつけくなりて人／＼をめせと」(55

⑤ かよひけりーかよひける阿 ⑥ けん中将ー源中納言阿 ⑦  
し、うはかりーこしうはかり阿 ⑫ 見あげ給つればー見あげ給  
へれば阿

ウ) ちかくさふらはねはふとき、つけてまいる人もな  
しわな、き給さま水のやうにあせもなかれて物もおほ  
え給はぬけしきいとあはれにらうたけなりかすならぬ  
ともいとかくまでもおもはさるへき身とも思給へられ  
すなんむかしよりおほけなき心侍らしをひたふるにこ  
めてもやみ侍なましかは心中にもくるしくても過ぬへ  
かりけるを中／＼にもらし聞えさせて院にもきこしめ  
されにしをこよなくもてはなれてもおほしのたまはせ  
さりけるに」(56才) たのみをかけてそめ侍て身のか  
すならぬひとときはに人よりふかき心さしをもむなく  
なし侍ぬるとうこかし侍し心なんよろつにいまはかひ  
なき事をおもひたまへかへせといかはかりしみ侍にけ  
るにか年月にそへてくちをしくもつらくもあはれにも  
そふかくおもひ給へまさらる、にせきかねてかうおほ

③ かすならぬともーかすならすとも阿 ④ おもはさるへきーお  
もほさるへき阿 ⑤ 侍らしをー侍しを阿 ⑨ たのみをかけてーた  
のみをかけ阿 ⑨ 身のー身阿 ⑭ まさらる、にーまきる、に阿

けなきさまを御覽せられぬるもかつはいとおもひやり  
なくはつかしければつみをもき心もさらに侍るましと  
いひもて行に此人なりけりと (1178) おほすに (56  
ウ) いとあさましくむくつけくてつゆいらへをたにも  
し給はすいとことはりなりよにためしなきことにも侍  
らぬをめつらかなさけなき御心はえは心うくてひた  
ふるなる心もこそつき侍れあはれとたにすこしきこし  
めしをくと一ことの給はせよまかて侍りなんとよろつ  
に聞え給よそに思ひやりきこゆるほとはつかしくを  
よひなく見えたてまつらんことをしはかられ給にた  
ゝかたはしをかはかり聞え中くかけくしきことは  
なくてやみなんと思しかともいとさ (57オ) はかり  
けたかくはつかしけにはあらてなつかしくけちかくら  
うたけになよくとのみ見え給ふ御けはひのあてにい

③此人なりけりと―此人なりけると阿 ⑤ことはりなり―こと  
はりなき阿 ⑤ことにも―ことも阿 ⑥御心はえは―御心はへ  
には阿 ⑫いとさはかり―心ときはかり阿 ⑭見え給ふ―見え  
給阿

みしうおほゆる事そ人にことなりけるさかしく思しつ  
むる心もうせていつちもくゝゐてかくし奉てわか身も  
よにふるさまならすあとたえなはやとまで思みたれぬ  
たゝいさゝかまとろみたる夢にかのてならしゝねこの  
いとらうたけにうちなきてたゝありしさまなからきた  
るをこの宮にかへし奉らんと思てわかくしてきたると  
おほし (57ウ) きをなにゝたて奉らんと思ほとにう  
ちおとろきていかに見つる夢ならんと思ほとに宮はい  
とあさましくうつゝともおほさぬに御むねひしけてお  
ほしくたくをなを (1179) のかれぬ御すくせのあさか  
らぬとおほしなさせ給へみつからの心なからもうつし  
心にはあらずなんおほえ侍とてかのおもほえぬみすの  
ひまをねこのつなひきたりしゆふへの事もきこえいて  
たりけるにさはたありけんよちきり心うくくちおしか

①さかしく―さはかしく阿 ⑦たて奉らんと―奉らんと阿 ⑨  
御むね―御むけ阿 ⑬つなひきたりし―つなきたりし阿



りける御身なりけりとおほしぬ院にも今はえみえ奉らしとかなしく心ほそくいと」(58才) おさなけになき給ふかたしけなくあはれと見奉て人の御涙をさへのこへは袖はいと、つゆけく成行明行けしきなるにいてん方なく中／＼なりいか、はし侍へきいみしくにくませ給へは又聞えさせん事もありかたきをた、御一こゑをきかせ給へとよろつに聞えなやませはうるさくわひしくて物のさらにいはれ給はねはむくつけくこそなり侍ぬれまたかゝるやうはあらしとうしと思ひ聞えてさらにふようなめり身をやはいたつらになし侍らんとすてかたきに思わひて」(58ウ) こそかくまでもこよひにかきり侍らんもさすかにいみしくなんつゆにても心のゆるひたるさまなとはそれにかへつるにてもすき侍なましとてかきいたきていつるにはてはいかにし

⑧むくつけく―はて／＼はむくつけく阿 ⑨いとうしと―うしと阿 ⑬心のゆるひたるさまなとは―御心のゆるひさまならは

阿 ⑭いかにしつるそと―いかにしつるそ阿

つるそとあきれておほさるつまとのひやうふをひきひろけてとをを(1180) しあけたれはわたとの、みなみのくちのよへいりしとはまたあけなからあけくれのほとなるへしほのかにても見奉らんの心あればかうしをやをらひきあけてかういとつらき御心にうつし心もうせ給ぬすこしおもひのと」(59才) めよとおもひされはあはれとたにもの給はせよとをし奉るにいとめつらかなりとおほして物いはんとしたまへとわな、かれていとわひしけなる御さまなりた、あけに明ゆくにいと心あはた、しくてあはれなる夢かたりをたに聞えさすへきをゆめ／＼にくませ給なおほしあはする事もありなんと聞えさせてのとかならてたち出るあけくれ秋の空よりも心つくしなり

おきて行空もしられぬ明くれにいつくの露」(59

④心あれば―心はあれば阿 ⑥おもひされは―おもはされは阿

ウ)のかゝる袖なりとひき出てうれへきこゆれはいて  
なんとするにすこしなくさみ給て

明くれの空にうき身はきえななん夢なりけりと見  
てもさむへくとはかなくの給こゑなどのわかくをかし  
きをきゝさすやうにていてぬるたましゐはまことに身  
をはなれてとまりぬる心ちす女宮の御もとにもまうて  
給はて大殿へそしのひておはしぬるうちふしたれとも  
めもあはす見つる夢さたかにあ(1181)はん事かたき  
をさへ思にかのねこもありし」(60才)さまいとこひ  
しく思いてらるさてもいみしきあやまちをしつる身な  
れよにあらんこともまはゆくけはひをそろしく空はつ  
かしき心ちしてありきなともし給はす女かたの御ため  
さらにもいはすわか心ちにもいとあるましき事といふ  
中にもむくつけくおほゆれはおもひのまゝにもえまき

⑤たましゐは―「たま」右肩朱合点中 ⑥まうて給はて大殿へ  
そゝまうてたまひて大殿へ阿 ⑦うちふしたれとも―うちたれ  
とも ⑩身なれ―身なれは阿

れありかす御門の御めをもとりあやまりても物の聞え  
あらんにかはかりおもはんことゆへは身のいたつらに  
ならん事くるしくもおほゆましし」(60ウ)かいちし  
るきことにはあらずともこの院にめをそはめられたて  
まつらん事はいとおそろしく思かきりなき女ときこゆ  
れとすこしもよつき給へる心そひうへはゆへありこめ  
かしきにもしたかはすしたの心そひたまへるなとこそ  
とある事かゝる事にうちなひき心かはり給たくひもあ  
りけいとふかき事はおはせねとひたおもむきに物お  
ちし給へる御心ちに又いましも人に見つけきゝつけら  
れたらんやうにまはゆくはつかしくおほさるればあか  
き所にたにえいて給はす」(61才)いとくちおしき身  
なりとのみおもほししるなやましけにし給と人の聞え  
ければおとゝきゝろき給ていみしく御心をつくし給

④ことには―かとはは阿 ⑥こめかしきにも―こめかしにも阿  
⑫えいて給はす―いて給はす ⑭きゝろき給て―きゝおとろき  
給て阿

(1182) ことに又うちそへていかにおはしますにかとお  
ほしておはしまし給へりことさらそこはかとなくくる  
しけにもおはせすいといたくはちらひしめりてさやか  
にもえ見あはせたてまつり給はねはなをひころへつる  
をうらめしとおほすにやといとおしくおほしてかの御  
心ちわつらひ給さまいまはのちきりにもこそあれおろ  
かなる」(61ウ) さまを見えをかれんも心くるしうな  
ん又おもふ人もなきやうなるありさまをいはけなかり  
しほとよりあつかひそめ侍ていまさらえ見はなつまし  
ければ月ころかくあつかひよろつをしらぬさまにすこ  
し侍なりをのつから此ほとすきは見給なをしてんと  
み聞え給かくけしきもしり給はぬにつけてもいとおし  
くはつかしくて宮は人しれすなみたくましくおほさる  
かんの君はまいて中／＼なる心ちのみまさりておきふ

①おほしてーおほし阿 ⑤おほすにやとーおほすにやおほすに  
やと阿 ⑫つけてもーつきても阿

しあかし暮しわひ給まつりの日なと物見にあ」(62オ)  
らそひ行内のきんたちかきつれていひそゝのかせとな  
やましけにもてなしてなかめふし給へり女宮<sup>×の</sup>をはかし  
こまりたるさまにてよろつもてなし聞え奉りておさ  
／＼うちとけても見たてまつらすわか方にはなれいて  
いと物心ほそくつれ／＼におほさるわらはへのもちた  
るあふひを見給て(1183)

くやしくそつみそめてけるあふひ草神のゆるせる  
かさしならぬにとおもふも中／＼なれとひとやりなら  
ぬなくさめに世中しつかならぬ」(62ウ) 車のあしを  
となとをよその事にきゝてくらしかたくおもほゆ女宮  
かゝるけしきのすさまじけさもをのつからしり給へは  
何事とはしり給はねとはつかしくめさましきに物おも  
はしくそおほされける女房なと物見にいてゝのとやか

なれはうちなかめてさうのことなつかしくうちまさく  
り給ておはするけはひもさすかにあてになつかしけれ  
とおなしくはいま一きはまさらさりける身のすくせよ  
とおほさる

もろかつらおちはをなに、ひろひけんはむつ」

(63才) ましきかさしなれともとかきすさみたるもい  
となめけるひとりことなりかしおと、はまれくわ  
たり給てはえふとも立かへり給はすしつ心なく思給に  
たえ入給ぬとて人ま入たれはさらに何事もおほさす御  
心もくれてわたり給みちのほと心もとなきにけにか  
の院はほとりのおほちまて人たちはきたりとの、う  
ちましてなきの、しるひ、きいとまかくしければあ  
れにもあらぬ心ちして入給ふれはひころはい (1184)  
さ、かくもま見え給へるをにはかになんかうお」 (63

②あてになつかしけれと一なつかしけれと阿 ③まさらさりけ  
る一まさらさりけり阿 ⑥かきすさみたるも一かきすさひたる  
も阿 ⑨たえ入一た、入阿 ⑪たちはきたり一立さはきたる阿

はしますとてさふらふかきりわれもくれ奉らしとま  
とうさまいとおほかりみすほうのたんこほちそうとも  
さるへきかきりこそまかてねほろくとまかてさはく  
いといみしさはかきりとおほしけるかあさましければ  
物のけなとにこそ物し給らめいとかくひたふるにな物  
せそなとしつめ給ていよくいみしき願ともを立させ  
給御かちともすぐれたるけんさをめしと、めてかきり  
ある御いのちつきたりともいましはしのとめ給へふと  
うそのものとちかひありその御ひかす」 (64才) の  
かきりたにうけと、め給へといみしき心をおこしてか  
しらよりけふりをたつるにけにあらはれ出ぬ院もた、  
いま一たひめを見あはせ給へいとあへなくてかきりな  
りつらんほとをたに見すなりにけることのくやしうか  
なしきをとおほしまとへるさまとまり給へきにもあら

⑧ふとうその「ふと」左肩朱合点中 ⑪た、いま一たひめ  
を見あはせ給へ一た、一たひめを見あはせ給へと阿

ぬを見たてまつる心ちもたゝをしはかるへしいみしき  
御心のうちをほとけも見奉り給にや月比あらはれいて  
こぬ物のけちいさきはらはにうつりてよはひのゝしり  
さけふにやう／＼いきいて給」(64ウ) ぬうれしく(11  
85)もゆかしくもおほしさはかるいといみしくてうせ  
られて人はみなさりね院の御みゝにあてゝ聞えんおの  
れをいみしく月ころてうしわひさせ給になさけなくつ  
られはおなしはおほしらせんとてなり身をくた  
きておもへとさすかに御いのちもたうましくおほしま  
とふを見奉れはいまこそかういみしき身をうけたれい  
にしへの心のこりてかくまいりきたれは物の心くる  
しさもえしのはてつゐにかくあらはれぬる事となくさ  
またゝかのむかし見給し物のけのさまなり」(65オ)  
あさましくむくつけくおほししみにし事のかはらぬ

⑤ ゆかしくもーゆゝしくも 阿

⑨ おほしまとふをーまとふを 阿

もゆゝしければ此はらはのてをとりてひきすへ給てさ  
まあしうもせさせたまはてまことにその人のけはひか  
よからぬ物のたはふれたるかきつねのやうの物のなき  
人のおもてをかりてかやうなる事もいふなるをたしか  
なるなのりせさせ給てまた人のしらさん事の心にし  
るく思いてつへからんことをいへさてなんいさゝかに  
てもしんすへきとのたまへはほろ／＼といたくなきて  
我身こそあらぬさまなれそれなからそらお」(65  
オ)ほれする君はきみなりいとつらし／＼(1186)となき  
給物からさすかに物はちしたるけしきはらす中／＼  
いとうとましくて心うければ物をいはせしとおほす中  
宮の御事にてもうれしくかたしけなしとなんあまかけ  
りても見奉れともみちことになりぬれは子のうへま  
てもふかくおほえぬにやあらんなをみつからつらし

④ かやうなる事もーかやうの事も 阿  
とつらしと 阿

⑨ いとつらし／＼とーい

とぞ思聞えつゝ心のしうしんはとまる物なりけりその  
中にもいきてのよに人よりをとしめおもほしけんよ  
りは思とちの御物かたりのつゐてに心よからす」(67  
オ)にくかりしありさまをの給出たりしなといとうら  
めしくいまはたゝなきにゆるしてこと人のいひをとし  
めんをもはふきかくし給へとこそ思給ふれとうち思し  
はかりにかくいみしき身の気はひなりければかく所せ  
きなり此人をふかくにくしと思きこゆる事はなけれと  
まほりつよくいと御あたりとをき心ちしてえちかつき  
まいらす御こゑをたにほのかになんきゝ侍らしいまは  
此つみのかるむはかりの事をせさせ給へすほうときや  
うとのゝしるも身にはいみし」(66ウ) うくるしきほ  
のをにまつはされてさらにたうときこゑたに聞えねは  
いとゝかなしくなん中宮にも此よしをつたへ聞え給へ

ゆめく御宮つかへのほとにきしろひそねむ心つかひ  
給(1187) な齋宮におはせしころの御むくひかるむへ  
き事をせさせたまへといとくやしき事にありけるとい  
ひしゝかれと物のけにむかひいて物かたりし給はんも  
かたはらいたければをしこめてうへをは又ことかたに  
しのひてわたし奉らんとせさせ給れとかくうせ給ぬ  
といふ事世中にみちて御とふらひに聞え給人くもあ  
れはいと」(67オ) ゆゝしくおほさるけふのかへさみ  
にいそき出給へりける上達部などかへり給みちにかく  
人のまねひ申せはいみしき事にもあるかないけるかひ  
ありつるさひはい人のひかりかくれ給にてけふの雨は  
ふるなりけりとうちつけ事し給人もあり又かくたらひ  
ぬる人はかならずかくこそはなかゝらぬことなるを何  
をさくらにといへる事のやうにかゝる人のいとなく

③ いひしゝかれとーいひしらすれと阿 ④ むかひいてーむかひ  
て阿 ⑩ かひありつるーかひあり阿 ⑪ かくれ給にてーかくれ  
給ひにて阿 ⑫ ふるなりけりーふるなりける阿 ⑬ 何をさくら  
にー「何を」右肩朱合点中

よのたのしみをつくさんはかたはらの人くるしからん  
さこそ二品宮はもとの御おほえにしたかひ給はめなど  
うちさゝめき」(67ウ) けりゑもんのかみきのふいと  
くらしかたかりしをと思ひてけふは御おとうとの左大  
弁頭宰相などをおくのかたにのせて見給けりかくいひ  
あひけるをきくにむねうちつふれて何かうき世に久し  
かるへきとひとりこちてかの院にたれもくま入(11  
88) 給たしかならぬ事なればゆゝしうやはとてたゝ大  
方の御とふらひにま入たまへるにかく人のなきさはけ  
は立さはき式部卿宮わたり給ていといたくおほしほれ  
たるさまにてそ入給人くも御せうそこそ聞えたまは  
す左大將なみたをしのかひてそたちいて給へるに」  
(68オ) いかにくゆゝしきさまに人の申つれとしりか  
たきことにてななたゝひさしき御なやみをおもふたま

⑤ いひあひけるをきくにむねーいひけるをきくにむねの阿 ⑥  
何かうき世にー「何か」右肩朱合点中 ⑩ 立さはきーまこと成  
けりと立さはき阿 ⑬ 人のー人阿

へなけきてまいりつるとの給いとおもうなりて月日へ  
給ぬるをこの曉たえ入給けるを物のけのしたるになん  
ありけるやうくいきいて給へるやうにきゝなし給て  
いまなん人心ちしつめて侍れとまたいとたのもしけな  
しや心くるしきことにこそとてまことにいたくなけき  
たるけしきなりゑもんのかみの君をのかあやしき心な  
らひにや此きみこそいとさしもしたし」(68ウ) から  
ぬまゝはゝの御事にいたく心しめたれとめをとゝむか  
くこれかれま入たまへるよしきこしめしておもきひや  
うさのにはかにとちめつるさまなりけるに女房などは  
心おさめすみたりかはしくさはき侍つるに身つからも  
あはたゝしきほとにてなんことさらになんかく物し給  
へるよろこひにき(1189) こゆへきとの給かんの君む  
ねふたかりつふれてかゝるおりのらうらうのおりなら

① おもうなりてーをもくなりて阿 ③ きゝなし給てーきゝなし  
給てこそ阿 ⑦ いとさしもーさしも阿 ⑨ これかれーこれかれ  
に阿 ⑬ よろこひにーよろこひは阿

てはえまいるましうけはひはつかしく思物から心中こそははらきたなからめかくていきいて給てしも中くおそか」(69才)りしくおもほして又くいみしきほうともをつくしくはへおこなはせ給うつし人にてたにむくつけかりし人の御けはひまいてよかはりあしき物のさまになりたまへらんをおもひやると心うければ中宮をあつかひ聞え給さへそ此おりは物うくおほさるゝいひもてゆけは女はおなしつみふかき物そかしとなへての世中いとはしうかの又人もきかさりし御中のむつ事にけにほのかたりいて給し事もまことにおほしいつるにいとわつらはしうなり給御くしをろひてんことをせち」(69才)におほしたれはいむことのちからにもやとていたゝきしるしはかりはさみて五戒はかりうけさせ給御戒の師いむ事のすくれたるよし仏に申にあ

- ③おそかりしくおそろしく阿 ⑧いひもてゆけはーいでもてゆけは阿 ⑧女はおなし「女は」左肩朱合点中 ⑩事もー事阿  
⑬五戒はかり「五戒」左肩朱合点中

はれにたうとき事ましりて人わろく御かたはらにそひいてなみたをしのこひ給つ、仏をもろともにねんし聞え給さまようかしこくおはする人もえしつめたまはぬわさなりけりいかさまなるわさをしてこれ(1190)をすくひかけと、め奉らんとのみおほすにほれくしきまで御かほもおもやせ給にけり五月などはましてはれくしからぬ空のけしき」(70才)もえさはやき給はてありしよりしすこしよろしけれとたへすなやみわたり給物のけのつみすくうへき仏経かきつ、くやうしなにくれとたうときわさせさせ給あらはれそめてはおりくかなしけなることをいへとさらにこの物のけさりはてすいとあつきほとはいきもたえつ、いよくよはり給へはいはんかたなくおほしなけきたりなきやうなる御けしきにもいと、かゝる御けしきをあはれに心く

- ⑧ありしよりしーありしよりは阿 ⑩せさせ給ーせさせ阿



るしと見たてまつり給てかくてうせなんも我身ひとり  
はさらにくやしき事」(70ウ)ののこるましけれとお  
ほしまとふさま見るにむなくみなされ奉つらんかい  
とおもひくまなかるへければにやおもひをこして御か  
ゆなといさゝかまいるけにや月になりてそときく御  
くしもたけなし給けるめつらしく見たてまつり給に  
もなをいとゆゝしくて六条にはあからさまにもえわた  
り給はすひめ宮はあやしかりしことをおほしなけし  
より(1191)やかてれいのさまにもおはせすなやまし  
くし給へとおとろくしうはあらてたちにし月より物  
きこしめさていいたうあをみそこ」(71オ)なはるゝわ  
さをし給かの人をなをいとわりなく思あまりおりく  
は夢のやうに見たてまつりけれと宮はつきせすうとま  
しくわりなき事におほしたり院をいみしくおち聞え給

③みなされ奉つらんかーみなされ奉らんか阿  
そー六月になりてそ阿 ⑧ひめ宮はーひめ君は阿 ⑫思あまり  
おりくはー思ひあまるおりくは阿

御心にありさまも人のほともひとしくやあるといたく  
よしめきすこしわかやかになまめきたれはなへての人  
にはまさりてめてられおさなくよりさるたくひなき御  
ありさまにならひたまへる御心ちにすこしめさましく  
見給ほとにかくのみなやみわたりたまふはあはれなる  
御すくせにそありける御めのとた」(71ウ)ちも見た  
てまつりとかめて院のわたり給こともいとたまさかな  
をとつらきやうにうらみ奉りけるかく恨給ふときこ  
しめしてそわたり給女君はあつくむつかしとて御くし  
すましてさはやかにもてなし給へりふしなからうちや  
り給へれはとみにもかつかねともつゆはかりうちふく  
みまかふすちなくてゆらくとしてかゝれりあをみお  
とろへ給へるしもさをきましてしろくうつくしけにてす  
きたるやうにみゆる御はたつきなとよになくらうたけ

⑧うらみ奉りけるー見奉りける阿 ⑩もてなし給へりーもてな  
し給へる阿 ⑪かつかねともーかはかねとも阿

なりなつむしなどのからのやうにまたい」(72才)と  
よはけにあさましくおはす(1192)年比見給はてすこ  
しあれたりつる院の中たとしへなくきら／＼としてせ  
はけにみゆるきのふけふかう物おほえ給ひまにていと  
心ことにつくろはれたるやり水せんさいのうちつけに  
心ちよけなるを見いたし給てあはれにいまゝてへにけ  
るをおもほす池はいとすゝしけにてはすの花のさきみ  
たれたるにははいとあをやかにて露のいときら／＼  
とみえわたるをかれ見給へをのれひとりしもすゝしけ  
なるかなとの給におきあかりて見」(72ウ)いたした  
まへるもいとめつらしければかくて見たてまつるこそ  
いとゆめの心ちすれいみしくわか身さへかきりとおも  
ほゆるおり／＼ありしそやとなみたをうけての給へは  
みつからもあはれにおほえ給て

②見給はてゝすみ給はて阿

きえとまるほとやはふへきたまさかにはちすの露  
のかゝるはかりをなどの給て

ちきりをかんの世ならてもはちすはに玉ゐる露  
のこゝろへたつないてたまふかたさまは物うけれとう  
ちなにもきこしめさん所もありなやみ給よしきゝて  
もほとへぬるをめちかきに心をまと」(73才)はしつ  
るほと見たてまつる事もおさ／＼なくてかゝる雲間に  
さへやたへこもらんとおもほしたちてわたり給ぬ宮は  
御心のおにゝみえたてまつらんもはつかしくつゝまし  
くおほすに物なと聞(1193)え給御いらへも聞えたま  
はねはひころのつもりをさりけなくてつらしとおほし  
けると心くるしければとかくこしらへ聞え給おとなひ  
たる人めして御心ちのさまなととひ給れいのさまなら  
ぬ御なやみになとおとなひ給御さまをきこゆあやしう

①きえとまるゝきゝとまる阿 ②はかりをゝはかりは阿 ③  
つゝましくおほすにゝつゝましく阿 ④おとなひゝおこなひ阿

ほとへてめつらしき御事にもとはかりの給て御心」

(73ウ)の中にはとしころへぬる人／＼もさる事なきをいかなる事にかふちやうなる御ことにもやとおもほせはことにあひしらはてた、なやみ給へるさまのいとうたけにおはするをいとあはれに見奉り給からうしでおほしたちてわたり給しかはとみにもえたちかへり給はていかに／＼とうしろめたなくおほしめさるれば御文をのみかきつくし給いつのまにつもる御ことのはにかあらんいてやすからぬよをもみるかなとわか君の御あやまちをしらぬ人／＼はいふこし、うそかゝるにつけてもむねうちさはきけるかの人もかくわ」(74オ)たり給ときくにおほけなく心あやまちしていみしき事ともをかきつけておこせ給へりたいにあからさまにわたり給へりけるほとなればしのひて御らんせさすむつ

③ふちやうーふちやう阿

⑦うしろめたなくうしろめたく阿

⑧御ことのはにかー御ことのはわか阿 ⑬おこせ給へりーをこせ給へる阿

かしき物見するこそいと心うけれとて心ちのいとあし

きにとてふ(1194)し給へるをなをはしかきのいとむねつふる、にようもえかくし給はて御しとねのしたにさしはさみ給つよさりつかた二条院へわたり給はんとて御いとま聞えたまふこ、にはけしうはみえ給はすまたいとた、よはしけなりしさまを見すて給たるやうに思はるゝを」(74ウ)いまさらにいとおしうひか／＼しく聞えなす人ありともゆめ心をいておほすないま見なをし給てんなどかたらひ聞え給れいはなまいはけなき御たはふれことなともうちませ聞え給をいいたくしめりてさやかにも見あはせ奉りたまはぬをた、世のうらめしき御物かたりなと聞え給ほとにくれにけりすこし御とのこもりたりけるほとに日くらしこゑはなやかになくにおとろき給てさらはみちたと／＼しから

⑧ありともーあるとも阿

⑨かたらひ聞え給ーかたらひ聞給阿

⑩聞え給をいいたくしめりてさやかにも見あはせ奉りたまはぬをー聞え給はぬを阿 ⑭みちたと／＼しからぬー「みち」右

肩朱合点中

ぬほとにとて御そなとたてまつりなをす月まちてもと  
ゆふなる物をといとわかやかなるさましての給かにく  
からすかしそのまにもやとおほすと心くるしけにおほ  
してたちとまり給ぬ (1195)

ゆふ露に袖ぬらせとや日くらしのなくをきくく  
いて、ゆくらんかたなりなる御心にまかせていひいて  
給へるもらうたけなれはついぬ給てあなくなるしやとう  
ちなけき給て

まつさともいか、きくらんかたく／＼に心さはかす  
日くらしのこゑなとおほしやすらひてなをなさけなか  
らんも心くるしければとまり給ぬしつ心 (75ウ) な  
くさすかになかめられ給て御くた物はかりまいりなと  
して御とのこもりぬあさす、みのほとにわたり給はん  
とてとくおき給よへかはほりをおとしてこれはかせぬ

⑨まつさとも―まつかたも阿

るくこそありけれとて御扇をき給てうた、ねし給ひし  
をましをたちとまり給て見給に御しとねのすこしまよ  
ひたるつまよりあさみとりのうすやうなるふみのをし  
まかれたるはしみゆなに心もなくひきひろけてみたま  
へはおとこのてなりかみのかなといとゑんにしみてこ  
とさらめきたるかきさまなりふたかさねにうす (76  
オ) すみにこま／＼とかきたるを見給にまきるへき事  
なくその人のてなりけりと見給御か、みなとあけて奉  
る人はなを見給へきふみにこそはと御心もしらぬにこ  
し、うつほねへをる、とて見つけてきのふのかみの色  
と見るにいとみしうもあるかなきのふのかみの色な  
るからにむねつふ (1196) 〳となる心ちすいと心ち  
あしけにて御かゆなとまひるかたにめもやらすいてさ  
てもそれにはあらしといと、いみしうさる事はあるな

⑬まひるかたにめもやらすいて―まいるかたかたにめも見やら  
すいて給ふ阿

んやかくし給てんと思なす宮はなに心もなくまた」

(76ウ)御とのこもりたりあないはけなかゝる物をちらし給てわれならぬ人も見つけたらましかはとむけに心にくき所なき御ありさまをうしろめたしとは見るかしとおほすいて給ぬれは人くすこしあかれぬるにし、うよりきてきのふの物はいかゝなり侍にけんけさ院の御らんしつるふ文の色こそいみしうにて侍つれときこゆれはあさましとおほすになみたたゝいてきにいてくれはいとおしき物からいふかひなの御さまやと見奉るいつくにかをかせ給にし人くのま入しにことありかほにちかくさふらはしとさはか」(77オ)りのいみをたに心のおにゝさり侍しをいらせ給しほとはすこしすへ侍にきかくせ給つらんとおもひ給へにしとなんきこゆれはいさとよ見しほとに入給にしかはえおきあへて

⑤しゝうゝこしゝう阿 ⑦ふ文の御文の阿 ⑧なみたゝなき阿

⑪いみをたにゝ心みをたに阿 ⑫すこしすへ侍にきかくせ給つ

らんとおもひ給へにしとなんきこゆれはいさとよ見しほとに入給にしかはゝすこしほとへ侍にかくさせ給つらんとおもひ給へにしかは阿

さしはさみしをわすれにけりとの給に聞えんかたなしかの君もいみしうおちはゝかり給けしきにてもしもりきこしめす事もあらんはとかしこまり聞(1197)え給し物をほともへすかゝる事のいてまうてくるよすへていはけなき御ありさまにて人にも見えさせ給ければとし比さはか」(77ウ)りわすれかたく恨いひわたり給しかとかくまで思給へき御事かはたか御ためにもいとおしくそ侍へき事とはかりなけき聞ゆ心やすくわかくおはしませはなれ聞えたるなめりいらへもえさせ給はてたゝなきになき給いとなやましくてつゆはかりも物もきこしめさねはかくなやましくせさせ給を見をき奉らせ給ていまはをこたりはて給へる御あつかひにのみ心をいれ給へるとのみつらく思いふおとゝは此ふみのなをあやしくおほさるれば人の見ぬかたにてうち返

しつゝ見」(78才) 給さふらふ人／＼の中にもかの中  
納言のてににたるてしてかきたるかとまでおほしよれ  
とことはつかひきらくとたかふへくもあらぬ事とも  
のみありとしをへておもひわたりけることのたまさか  
にほいかないて心やすからぬすちをかきつくしたるこ  
とのはいと見ところありてあはれなれといとかくさや  
うにはかくへしやあたら人のふみみこそおもひやりな  
うかきけれおちゝる事もあるをとおもひしかはむかし  
かやうにこまやかなるへかりしもことそきて」(78ウ)  
こそまきはししる人のふ(1198)かきようひはかた  
きわさなりけりとかの人の心をさへ見おとし給ぬさて  
も此人をはいかゝしなひ奉るへきかのめつらしき御さ  
まの心ちもかゝる事のまきれにてなりけりいてあな心  
うや人つてならすうきことをしる／＼ありしなからも

見奉らん事よとわか御心なからもえおもひなをすまし  
うおほゆるになをさりのすさひに心をとめぬ人たにま  
たことさまの心わくらんとおもへは心つきなくおもひ  
へたてらるゝをまいてこれはさまことにおほけなき人  
の心に」(79才) もありけるかな御門の御めをあやま  
つたくひむかしもありけれとそれは又ことなり宮つか  
へといひて我も人もおほそらにおなし君になれつかう  
まつるほとにをのつからさるへき事にふれて心をは  
しそめ物のまきれもおほかりぬへきわさなり女御かう  
ゐといへともかゝるかたにてかたをなるときはの人もあ  
りき心はせかならすくれておもからぬうちましりて  
おもはすなる事もあなれとおほろのさたかならぬあや  
まちもみえぬほとはさてもましらふ」(79ウ) やうも  
あらんにふとしもあらはなるまきれありぬへしかくは

⑦ふみみこそ一文をこそ阿  
⑫御さまの御ありさまの阿

⑪わさなりけりとゝわさなりと阿

⑦おほそらにゝおほそりに阿

⑫おほろのゝおほろけの阿

かり又なきさまにもてなし聞えてうち／＼の心さしひく方よりもいつくしくかたしけなき物に思侍らん人をきてかゝる事(1199)はさらにたくひあらしとつまはしきせられ給御門と聞ゆれとたゝすなをにおほやけさまの心はえはかりにて宮つかへのほとも物すさまじき人の心さしふかきねきことになひきをのかしゝあはれをつくしおりふしのいらへをいひそめしねんに心かよひそむらんからひはけしからぬことのうちなれとよる方あ(80才)ありやわか身なからもさはかりの人に心をわけ給へくはおほえぬ物をといと心つきなけれと又けしきにいたすへきことにもあらすなとおほしめたるゝにつけて故院のうへもかくや御心にはしろしめしてやしらすかほつくり給けんおもへはその夜のことこそいかゝおそろしくあるましきあやまちなりけ

⑥ねきことに「ねき」右肩朱合点中 ⑦おりふしの「おりふし阿」 ⑨よる方ありやゝよるかたありや阿 ⑬その夜のことこそその世の事こそ阿

れとちかきためしをおもほすにそのみちはえもとくましき御心ましりけるつれなしつくり給へと物おほし見たるゝさまのしるかゝれは女君きえのこり(80ウ)たるいとおしみにわたり給てひとやりならす心くるしくおもひ聞え給にやと思給てこゝにはよろしくなり侍をか宮のなやましけにおはするにとくわたり給にしこそかたはらいたけれと聞え給へはさかしいならす見え給しかことなる御心ちにも見えたまはねはをつから心のとかに思給へられてなん内よりはたひ(1200)たひ御つかひありけりけふも御つかひありつかの院の聞えつけ給へれはうへもしかおもほしたるへしすこしもおろかにしもあらんはこなたかなたおほ(81才)さん所もいとおしき事とてうちうめき給へれは内のきこしめさん事よりもさうしみのうらめしと思聞

①このみちは「この」右肩朱合点中 ③しるかゝれは「しるければ阿」 ⑤なり侍をか宮の「なり侍をか宮の阿」

え給はんこそ心くるしからめみつからはおほしとかめ  
すともよからぬさまに聞えなす人かならすあらんと思  
侍れはいと心くるしきなりなどのたまへはけにあなか  
ちにおもふ心のためはわつらはしきよすかなれとよ  
つにたとりふかきこと、やかくやとおもほす人のおも  
はん事さへ思めくらさるゝを国王の御心をい給はんは  
かりしもはあさひ心ちすそしけるとほ」(81ウ) ほゑ  
みての給まきはすにわたり給はん事はもろともにか  
へりて心のとかにあらんとの給をこゝにはしはし心や  
すくて侍らんまつわたり給て人の御心をもなくさみな  
んほとにもと聞え給ほとにひころへぬひめ宮はかくわ  
たりたまはぬひころをも人のつらさにおもほすもわか  
をこたりうちませてかくなりぬるよとおほすに院にも  
きこしめしていかにおもほさんと世の中つゝましくな

⑥御心ー心阿 ⑦心ちすそー心ちそ阿 ⑩なくさみなんーなく  
さめなん阿 ⑬おほすにーおもほすに阿 ⑭世の中ー世中阿

んかの人もいみしく(1201) いひわたれとこし、うも  
わつらはしく思なきてかゝる事なんありしとつけ、  
れはいみしくいつのほとにさる事いてきけんかゝる事  
はありふ」(82オ) れはをのつからけしきにてもりい  
つる事もやあらんとおもひしたにいとつゝましくそら  
にめつきたるやうにおほえしをさしてたかふへくもあ  
らさりし事ともを見給けんかはつかしうかたしけなう  
かたはらいたきをあさ夕すゝみもなきころなれと身も  
ひへしむる心ちしていはいはむかたなくおほゆとしころま  
めことにもあたことにもまつめしまとはしま入なれつ  
る物を人よりはこまかにお」(82ウ) もほしとゝめた  
る御けしきのあはれになつかしきをめさましくおほけ  
なき物に心をかれ奉てはいかてかめをも見あはせ奉ら  
んざりとてかきたえほのめきまいらさらんも人も心を

①こし、うもーこしうも阿 ②つけ、れはーつけられは阿 ⑧  
あさ夕ー「あさ」右肩朱合点中 ⑨ひへしむるーひえしむ阿  
⑨まめことにもーまめこと阿



きかの御心にもおほしあはせんことのいみじさなどや  
すからすおもふに心ちもなやましくて内へもまいらす  
さしておもきつみにあたるへきにはあらねと身のいた  
つらになりぬる心ちすれはされはよとわか心もつらく  
おほゆつしやかに心にくきけはひみえたまはぬわたり  
そやまつはみすのはさまもさるへき事かはかゝら

(83才)しと(1202)大将の思給へるけしきそかしなと今  
そ思あはするしゐて此事を思さまさんと思かかるにあ  
なちになんをつけ奉らまほしきにやよきやうとても  
たゝひたおもふきにおほとかにてあてなる人はよのあ  
りさまをもしらすかつさふらふ人に心をひ給事もなく  
ていとおしき御身のため人のためいみじき事もあるか  
なとかの人の御事の御心くるしさもえ思はなたれ給  
はす宮はらうたけにてなやみわたり給さまのいと心く

③身のいたつらに「身の」右肩朱合点中 ⑧思さまさんと思  
思さまさんと思ふ阿 ⑩ひたおもふきに「ひたおもむきに阿 ⑬  
かの人の「かの阿 ⑬え思はなたれ給はす「思はなれ給はす阿

るしくかくおもひはなち聞え」(83ウ)給につけても  
うきにまじる恋しさもくるしうおもほさるれはわたり  
給て見奉給につけてもむねいたくいとおしうおほさる  
御いのりさまく「にせさせ給大方の事ありしにかはら  
す中く「いたはしうやんことなくもてなしきこゆるさ  
まをし給にちかくうちかたらひ聞ゆるさまはこよなう  
御心へたゝりてかたはらいたければ人めはかりをやす  
くもてなしとおほしみたるゝに御心の中しもくるしか  
りけるさる事みきともあらはし聞え給はぬにみつから  
いとわりなくおほしたるさま」(84才)いと心おさな  
しいとかうおはするけそかしよきやうといひなからあ  
まり心(1203)もとなうをくれたるよのたのもしけな  
ひわさなりとおほすに世中なへてうしろめたく女のい  
とあまりやはらかにをくれ給へるこそかやうに心をか

②うきにまじる「うき」右肩朱合点中 ④さまく「に「さま  
く阿 ④かはらす「かは」右肩朱合点中 ⑥うちかたらひ  
「かたらひ阿 ⑫をくれたるよの「をくれたるさまの阿

せ聞えん人はまいて心みたれなんかし女はかうはるけ  
所なくなよひたるを人もあなつらはしきにやさるまし  
きにふとめとまりぬ心つよからぬあやまちはしいつる  
なりけりとおほす右の大るとのゝきたのかたのことに  
とりたてたる」(84ウ) うしろみもなくおさなくより  
おやたちにはなれ物はかなきよにさすらふるやうにて  
おひいて給けれとかとくしくらうありて我も思かた  
におやめきしかとにくき心のそはぬにしもあらさりし  
をなたらかにいとつれなくもてなしすくしこのおとゝ  
のさるむしんの女房に心あはせて入きたりけるにもけ  
さやかにもてはなれたるさまを人にみえしられことさ  
らに人にゆるされあるさまにしなしてわか心とあるつ  
みにてなさすなりにしなといまおもへはいかにかとあ  
るとなりけるさて」(85オ) ちきりふかき中なりけれ

④ことにとりたてたる―ことによりたてたる阿 ⑬いかにかと  
あるとなりける―いかにかとあることなりけり阿

はなかくかくてもおなしことあらましかはわか心もて  
ありし事そとよ人も思すこしかろくしき思はくはか  
りなましかしいといたくもてなしてしわさなりといつ  
二条の内侍督君をはなをたえす思いて聞(1204) 給へ  
ととかくうしろめたひすちの事うき物におほしてか  
の御心よはさもすこしかろうおもひなされけりつゐに  
御ほいの事し給てけりときくはいとあはれにくちおし  
く御心うこきてまつとふらひ聞え給いまなとたにほ  
ひ」(85ウ) 給はさりけるつらさをあさからす聞え給ふ  
あまのよをよそにきかめやすまの浦にもしほたれ  
しもたれならなくにさまくなる事よのさためなきを  
心にしりていまゝてをくれぬるくちおしさをなんなへ  
てのよをおほしすつともさりかたき御ゑかうのうちに  
はまつこそはとあはれになんと聞え給へりとくおほ

②思はくはかり―おもわくはかり阿 ③いつ―おほしいつ阿  
④二条の内侍督君をは―二条内侍督君をは阿

したちにしことなれとこの御さまにか、つらひて人に  
しかあらはし給はぬことなれは心のうちにはあはれに  
むかしよりつらき御ちきりのさすかにあさくしもお

(86才) ほししらるいまはかくしもかよふましき御文  
のとちめとおほせはあはれにてすみつき心と、めてか  
ひ給つねなき世をはわか身ひとつにのみしり侍にしか  
とをくれたるとのたまはせたるになんけに

あま舟にいか、はおもひをくれける明石の浦にあ  
さりせし君かうに (1205) はあまねきかといいか、は  
とありけるかきあをにひのかみにてしきみにつけたま  
へりれいの事なれといいたくすくしたるふてつかひ  
のさまなど (86ウ) なをふりすおかしけなり二条院  
におはしますほとにてこの女君にいまはけんきたえぬ  
る事にてみせ奉り給いといたくこそはつかしめられた

③ おほししらるーおほししらぬをなとかた／＼におほししらる  
阿 ⑨ かうにはー「かう」左肩朱合点中ー系かうには阿 ⑬ この  
女君にーこの女君には阿

れさま／＼に心ほそひ世中のありさまをみすぐひつる  
かななへての世の事にてもた、はかなく物をいひかは  
し時／＼につけてあはれをもしりゆへをもすぐさすよ  
そなからのむつひかはひつへきは齋院と此君とこそは  
のこりありつるをみなそむきはて、齋院はたいといみ  
しうつとめまきれなくおこなひしつみ給なんなりなを  
こ、ちの (87才) 人のありさまをき、みる中にふか  
くおもくさすかになつかしきことのかの人のなすらへ  
にたにえあらさりけるかなをんなこおほしたてんこと  
よいとかたひわさなりけりすくせなといふ物はめに見  
えぬ物にておやのこ、ろにまかせかたしおひたらんほ  
との心つかひはなをおやのちからいるへかめりよくこ  
そあまたにて心をみたるましききりなりけれとしふ  
かくいらさりしほとはさう／＼しのわさやとさま／＼

① 心ほそひー心つかひ阿 ⑤ ありつるをー給つるを阿 ⑦ こ、  
ちのーこ、らの阿 ⑧ なすらへにたにえあらさりけるかなー御な  
すらへにたにあらさりけるかな阿 ⑨ おほしたてんーおふした  
てんことよ阿

にて見ましかはとなんなけかしきおりくありしわか  
宮(1206)を心しておほしたて奉り給へ女(87ウ)

御は物の心をふかくしり給ほとならてかくいとまなき  
ましらひをし給へは何事も心もとなひかたにて物し給  
らんみこたちなんなをあくかきりにてむつかるましく  
てのとやかによをすくひ給にうしろめたかるましく心  
はせはかけまほしきわさなりけるかきりありてとさま  
かうさまのうしろみまうくるたゝ人はをのつからそれ  
にもたすけられぬるをなどの給へはかくしきさま  
の御うしろみならずともよになからへんかきりは見た  
てまつらぬやうはあらしとおもふをいかならんとてな  
を心ほそけにて(88オ)をこなひをとゝこほりなく  
し給人うらやましく思やり聞え給かんの君にかのさま  
かはるらん御さうそくたちなれぬほととふらふへき

②おほしたて奉りーおほし奉り阿 ⑤あくかきりにてーあくか  
きりまで阿 ⑦かけまほしきーかきまほしき阿

をけさなといかにぬう物そそれさせ給へそれさせ  
給へひとくたりは六条の東の君に物し侍らんうるはし  
きほうふくたちはみるめもけうとかるへしさすかに  
その心はえ見せてをと聞え給へはあをにひのひとくた  
りをこゝにてせさせ給へくつくも所の人めして忍て尼  
の御くとももの事なにくれの事おほせ給御しとねうはむ  
しろうちしきなに(86ウ)くれ屏風などのことをい  
としのひてわさと(1207)かましくいそきさせ給か  
くて山の御門の御賀ものひて秋にも成ぬるを八月は大  
将の御き月にてかくところのことをこなひ給はんにひ  
んなかるへし九月は院の太后かくれ給し月なれば十月  
にとおほしまうけつ姫宮のいたくなやみ給ければのひ  
ぬ衛門督の御あつかりのみこなんそのつきにまいりた  
まひける大きおとゝいたちていとかめしうこまかに

①それーその阿 ③みるめもーうたてみるめも阿 ⑥御くとも  
の事ー御くとももの事に阿 ⑦屏風などのことをー屏風などのを  
阿

きよらをつくし給けんかんの君もそのついでにぞ思をこしていて給けるなをなやしくれいならすやまひ」

(89才)つき給てすくし給宮もうちはえて物のみつゝま  
しうていとおしくのみおもほしなけくけにや月おほく  
かさなり給まゝにいとくるしうおはしませは院は心う  
しと思聞え給かたこそあれいとらうたけにあへかなる  
さましてかくなやみわたり給をいかにおはせんとなけ  
かしうてさまゝにおもほしさはく御いのりなとにこ  
としはまきれおゝくてすこし給院にもきこしめしてら  
うたく恋しく思聞え給月ころかくほかゝにてわたり  
給こともおさゝなきやうに人のさうしければ」(89  
ウ)いかなるにかと御むねつふれて世中もいまさらう  
らめしくてたいの上のわつらひける比はなをそのあつ  
かひにときこしめ(1208)したるになまやすからさり

①つくし給けんゝつくし給けり阿 ②なやしくゝなやましく阿

⑥あへかなるさまゝあへるなるさま阿

しをその心もなをりかたく物し給はんはそのころをひ  
ひんなきことなとやいてきたりけんみつからしりたま  
はねともよからぬうしろみともの心にていかなる事と  
もけしからすいひつゝくるたくひきこゆかしなとさへ  
おほしよるそこまやかなるやこゝらおほしすてられし  
よなれとなをこのみちははなれかたくて宮の御かたに  
御ふみこまや」(90才)かにありけるをおとゝおはし

ますほとにて見給その事となくてしはゝゝえ聞えぬほ  
とにおほつかなくて年月をすくすなんあはれなりける  
なやみ給なるさまはくはしくきゝしのちは申すねんし  
ゆのついでにもおもひやるはいかゝよのなかはなをさ  
り心しりおもはすなる事ありとも忍すくひ給へうらめ  
しけなるけしきなとおほろけにて見しりかほにほのめ  
かすもいとしなゝきわさなるなとをしへ聞え給へりい

③いかなる事ともゝいかなる事ともありけん内わたりなとみや  
ひをかはすならひなとも阿 ⑧しはゝゝえ聞えぬほとにおほつ  
かなくてゝナシ阿 ⑨あはれなりけるゝあはれなりけり阿 ⑪  
なをさり心ゝなをさる心阿

とくおしくてかくうちくにあさましき事」(90ウ)  
はきこしめすへきにもあらすきりとてわかをこたりに  
ほいなくのみき、おほすらんことはりにのみおほしし  
みてこの御返事はいか、聞え給心くるしき御せうそこ  
にまろこそいとくるしけれおもはすにおもひきこゆる  
事(1209)ありともおろかに人の見とかむはかりはあら  
し更によもとこそおもひ侍れたかきこえなしたるにか  
あらんと給にはちらひてそむき給へるさまもいとら  
うたけなりいたくおもやせて物おもひくつし給へるい  
とあてにをかしいとおさなき御心はえをおもひをき」  
(91オ) 給ていたくうしろめたかり給なりけりと思あ  
はせ給へは今よりのちもよろつにかくまでもいかてき  
こえしと思侍れとうへの御心にそむくときこしめすら  
ん事のやすからすいふせきをこゝにたに聞えしらせす

④御せうそこにー御しうそこに阿 ⑥ありともーあるとも阿

てやかてなんいたりすくなくてた、人の聞えなす方に  
のみよるへかめる御心にはた、おろかにあさきにのみ  
おほしいまはこよなうさたすきにたるさまをあなつら  
はしうおほしめされてのみ見給らんもかたくにくち  
おしくもうれたうも」(91ウ) 思給へらるゝを院のお  
はしまさんほとこなたはなを心をおさめてかのおなし  
をきてたるやうもありけんさたすきぬをもおなしくな  
すらひに聞えていたくなかるめ給そいにしへよりほい  
ふかきをこなひのかたにもたとりすくなかるへき女な  
とにたにみな思をくれつ、いとぬるき事おほかるも御  
事によりなんひきと、められ侍これをみつからの御心  
に何はかりおほしまよふへきにはあらねといまはとて  
みすくひ給けんよのうしろみに(1210) ゆつりおひ給  
へる御心はえのあはれにうれ」(92オ) しっかりしをひ

①いたりすくなくてーいたるすくなくて阿 ⑥おなしをきてた  
るやうもーおほしをきてたるやうも阿 ⑫おほしまよふーおほ  
しまとふ阿

きつゝきてあらそひきこゆるやうにておなしさまにて  
見すて奉らん事のあへなくおほされん事をつゝみてな  
ん心くるしとおもひし人くいましはしかけとゝめら  
るへきほたしはかりなるも侍らす女御もかくてゆくさ  
きはしりかたけれと御子たちかすそひ給みつからのか  
たにのとけくは見をきつへきそのほかはたれもくあ  
らんにしたかひてもろとも身をもすてんにおしかる  
ましきよはひになんりにたるをやうくすゝしく思  
侍る院の」(92ウ) 御よのゝこり久しくもおはせしい  
とあつしくのみなりまさり給物心ほそけにのみおもほ  
したるにいまさらにおはすなり御なもり聞えて御心み  
たり給なこのよはいとやすしことにもあらす後のさま  
たけなんつみいとおそろしなとその事とはあかしたま  
はねとつくくゝと聞えつゝけ給になみたのおちてわれ

⑩なりまさり給なりまさる給阿 ⑪おはすなり御なりおもは  
すなる御名阿

にもあらす思しみておはすれはわれもうちなき給て人  
のうへにてもとかしときゝしふる人のさかしらよ身に  
かはる事にこそいかにうたてのおきなやとむつかしき  
御心そふらんと」(93オ) はかりの給つゝ御すゝりひ  
きよせ給て御てつからをしすり給かみとりい(1211)  
てゝかゝせ奉り給へと御てもわなゝきてえかきたまは  
すかのこまかなりし返事などはかくしもつゝますかよ  
はし給らんかしなとおもほしやるかいとうければよろ  
つのあはれもさめぬへけれとをしへてかゝせ奉給まい  
り給はん事は此月かくてすきぬ二宮の御いきをひこと  
にてまいり給けるをふるめかしきおほ君すかたにて立  
ならひかほならんもはゝかりある心ちし給けり霜月は  
た御き月なり年のおはり(93ウ) も物さはかく又こ  
の御すかたもみくるしくまち見給はんを思侍れとさり

①思しみてゝ思しらて阿 ⑥かゝせ奉り給へとゝかゝせ給へと  
阿 ⑨かゝせ奉給まいり給はん事はゝかゝせ奉給はん事は阿

とて又のふへきことにやはむつかしく思みたれすあきらかにもてなひ給て此いたくおもやせ給へるつくろひ給へなといとらうたしとさすかに見奉給衛門督をはなにさまのことにゆへある事のおりふしにはかならずことさらにまとはし給ての給あはせしをたえて御せうそこもなし人もあやしとおもふらんとおほせと見えんにつけてもいと、おれ／＼しきかたはつかしくみんに又た、ならすやとおもほしかへされ」(94オ) つゝ、月ころもやかて参たまはぬもとかめなし大方此人はなをれいのやうにあらすなやみわたりて院にも御あそひ(1212) なきとしなれはと思たるを大將君であるやうあるへしすき物はさためてわけしきとりしことにしのはぬ事やありけんと思よれともいとかくさたかにのこりなひさまなるらんとまては思をよひたまはさりけり

しはすに成ぬ十日よひとさためてまひともし殿さうちゆすりての、しる二条のうへはまたわたり給はさりけるをこのしか」(94ウ) くによりてそえしつめたまはすわたりたまへる女御君もさとおはします此たひの御子はおとこにてなんおはしましけるすき／＼にいとうつくしけにておはしますをあけくれもてあそひ奉給になんするよはひのしるしうれしくおもほされけるしかくには右大殿の北方わたりたまへり大將もうしとらの町にてまつうち／＼にてしかくのやうにて明くれあそひならしたまへは此御方は御まへの物は見たまはす衛門督かゝるおりのことにましらはさらんはいと」(95オ) はえなくさう／＼しかるへきうちにあやしとかたふきぬへきことなれはま入給ふへきよしありけるをおもくわつらふよし申てまいりたまはすさは

⑧ わたりたまへり―わたりたまへる阿



そこはかとなくくるしけなるやまひにもあらざるを思  
心あるにやとくるしくおほしてとりわきて御せうそこ  
つかはす(1213)父おとゝもなとかへさひ申されけるひ  
かゝしきやう院もきこしめさんをおとろゝしきや  
まひにもあらすたすけてまいりたまへとそゝのかし申  
給かくかさねて」(95ウ)申給へはくるしとおもふゝ  
まいり給ひぬ上達部もま入たまはぬほとなりれいのち  
かきかたのみすのまへにいれてみすおろし給てうちに  
おはしますいといたうけにやせゝなるさまにてあを  
みてれいのおりもほこりはなやかなるかたはおとうと  
の君たちにはもてけたれていとういありかほにしつ  
かなるさまそことなるをいとゝしうしつまりてさふら  
ひ給なとかは宮たちの御かたはらにさしならへたらん  
にもとかあるましきをたゝことのさまのたれもゝお

②とりわきてゝわきて阿 ③ひかゝしきやうゝひかゝしき  
やうに阿 ⑦上達部もゝまた上達部も阿 ⑭たれもゝたれも  
ゝ阿

もひやりなきこそつみゆるしかたけれ」(96オ)と御  
めとまれとさりけなくもてなしいとなつかしくてた  
いめんもひさしくなりけり月ころ色ゝのひやうさを  
見あつかひ心のいとまなきほとに院の御賀のためこゝ  
に物し給みこのほうしなとつかうまつり給へかめるを  
つきゝにさはる事しけてかくとしのせめくれは思  
のことくもしあへてかたのやうになんいもひの御はち  
まいるへきをかくなるいひなせることゝしきやうな  
れといへにおひ出侍(1214)るわらはへのかすおほく  
なりにけるも御らんさせんとて」(96ウ)はうしとゝ  
のへんことなとおきて又たれかとは思めくらしかねて  
なん月比とふらひ物し給はぬ恨をすてゝけりとの給御  
気しきうらなきやうなる物からいとはつかしきにかほ  
のいろたかふらんとおもほえて御いらへもとみにうけ

②なつかしくてゝなつかしく阿 ④心のいとまなきゝ心のいと  
まなき阿 ⑤給へかめるをゝ給へるめるを阿 ⑧かくなるゝかく  
なと阿 ⑩御らんさせんとてゝ御らんさせさせんとて阿

給はりなけき侍なから春のころをひよりれいもをこり  
侍みたりかくひやうといふ物おこりてわつらひ侍りて  
しつみてはか／＼しくふみたつる事も侍らす月日にそ  
へてなん内などへもまいらす世中にあとたえたるやう  
にてこもり侍る院のよはひたり給とやとしたる」(97  
オ) きさみにて人よりさたかにかそへたてまつりつか  
うまつるへき心さしもふかきよしちしのおと、も思を  
よひ申されしをかうふりをかけ車をおしますしてし身  
にてつかうまつらんにつく所なしけらうなりともおな  
し事ふかき心侍らんその心さし御らんせられよともよ  
をし申給こと侍りしかはおもきやまひをあひたすけて  
なんま入侍しいまはいよく／＼すくよかにおもほしすま  
していまめかしき御よそひをはまち見奉(1215) らん  
事ねかはしくもおほさるましく見たてまつり」(97ウ)

⑤よはひたり給とやとしたる—御よはひたり給としの阿 ⑫お  
もほしすまして—おもほしさまして阿

侍しをことゝもそかせ給てしつかなる御物かたりな  
とのふかき御思にかなはせ給つらんなんまさりて侍へ  
きなど申給いかめしくき、し御賀のことを女二宮の御  
かたにはいひなさぬもらうありとおもほすた、かくな  
んことそきさまに心をやれる世人はあさく見つへきを  
さいへと心えて物せらるゝにされはよとなん思なりけ  
る大将のおほやけさまはやう／＼をよつけためれとか  
やうになさけひたるかたはもとよりしまぬにやありけ  
んかの院などに何事も御心をよひ給はぬ事おさ／＼な  
き中」(98オ)にかくのかたの事は御心とゝめていと  
かしこうとゝのへしり給へるをさこそ思すて給へるや  
うなれとしつかにきこしめしすまさんことはいまし  
もなん心つかひせらるへきかの大將ともろともに見いれ  
て舞のわらはへのようなうひ心しらひくはへ給へ物のしな

⑥されはよとなん—されとよとなん阿

といふ物はたゝ我たてたりかたこそあれいと口おしきものなりなといとなつかしくの給つくるをうれしき物からくるしくつゝましくてことすくなにてとく御まへを立給なんとし給へればれいのやうにこまやかならてやうくすへりいてぬ」(98ウ) ひんかしのおとゝにてれいの大将君(1216)のつくろひいたし給樂人のさうそくなとおこなひくはへ給あるへきかきりをいみしくし給へるにそかたくくはしき心しらへそうもけに此みちのいとふかき人にそ物し給けるけふはかゝる心みの日なれと御かたくのもの見給はんにみ所なくはあらしとてまひのはらはへかの御賀の日はあかきしらするはみにゑひそめのしたかさねきるへしけふはあを色にすわうかさね樂人三十人けふはしらかさねきたりたつみのかたのつりとにつゝきたるらうを樂所にし

①たてたり―たてたる阿 ⑩給はんに―給はん阿 ⑬きたり―きたる阿 ⑬らうを―廊阿

て山の」(99オ) 南のきはより御前に出るほと程ちかうといふ物あそひて雪のたゝすこしちるに春のとなりちかき梅のけしき見るかひありてほゝゑみたりひさしのみすのうちにおはしませは式部卿御子右のおとゝ、大將殿のきんたちはかりうちにはさふらひ給て上達部はすのこにわさとならぬ日の事にて御あるしなどの事もけちかきほとにま入なしたり右のおとゝの三らう大將殿の四らう兵部卿宮のそんわうの君二人まんさいらくまたいとちひさきほとにてらうたけなり四人」(99ウ) なからいつれともなくたかき家のこともにてかたちおかしけにてかしつき出たる思なしにやんことなし又大將の御子内(1217)侍介はらの太郎君式部卿宮の兵衛のすけといひしいまはけん中納言とそ其御子わうしやう右の大とのゝ三郎れうわう大とのゝ三郎らくそん

③ほゝゑみたり―ほゝゑみたる阿 ④右のおとゝ大將殿のきんたちはかり―左のおとゝ大將のきんたちはかり阿 ⑥すのこに―すそこに阿

さてはたいへひらくまんさいらくなといふまひなんお  
なし御なからひのおさなきんたちまい給けり日くるれ  
はみすまきあけさせ給て物のけふまさるにいつつく  
しき御むまこのきんたちのかたちまいのさまよにみえ  
ぬてを」(100オ) つくしてふかきかとくしさをくは  
へてめつらかにまい給をいつれもいとらうたしとおも  
ほすおいたる上達部は涙おとし給式部卿の宮も御むま  
このけしきおもほして御はなの色つくまでしほたれ給  
あるしの院するよはひにそへてゑいなきこそと、め  
かたき物はありけれ衛門督めと、めてほゝゑまるゝい  
と心はつかしやさりともしはしなんさかさまにゆ  
かぬ年月をはえのかれぬわさなりとて見やり給ふ人よ  
りけにまめたちくんして心ちもいとなやましきに人をも  
しら」(100ウ) すそらゑいをしてさしつゝ、わきてかく

⑦式部卿の宮も一式部卿宮も阿 ⑨あるしの院一あるし院阿  
⑩ゑいなきこそゑいなきにこそ阿 ⑪さかさまに「さか」  
右肩朱合点中 ⑬まめたちくんして「まめたちくつして阿 ⑬  
なやましきに「なやましき阿

の給たはふれのやうなれともいとゝむねつふれければ  
きゝしらぬやうにてあるをさかつきのめぐりきたるも  
ことにかしらいたくおもほえけ(1218) れはけしきは  
かりにてまきはし給ふを御らんしとかめてたひくゝ  
もたせなからしゐはし給へははしたなくおもほえて  
もてわつらひ給またこともはてぬにかきみたれくるし  
ければまかて給まゝにいといたくまとひてれいのおと  
ろくしきゑいにもあらぬをいかなればかゝるなるら  
んつゝ、ましと物をおもへ」(101オ) るにけのあかりけ  
るにやいとさゆふはかりにふとおくすへき心よはさと  
はおほえぬをいふかひなくもありけるかなと身なから  
も思しらるゝしはしのゑいのまとひにもあらさりけり  
いたくわつらひ給北方おもほしさはきてよそにてはい  
とおほつかなしとてとのにわたし奉り給を女宮のおほ

①いと、一ナシ阿 ⑤しゐはし給へはしゐそし給へは阿  
⑧かゝるなるらん一かゝるならん阿

したるさまいと心くるしことなくてすくし給へき人は  
あひなたのめしていとしもあらぬ御心さしなれといま  
はとてわかれ給へきかとてにやとおもへはあはれにか  
なくおほし」(101ウ)なけかんことかたしけなきをお  
ほす。宮<sup>は</sup>す所もいと、しくなけき給よのこと、てなを  
おやはさる物にをきたてまつりてか、るなからひの  
とありか、るおりにもはなれたまはぬこそれいのさま  
なれかくひきわかれ給てたいらかに物(1219)し給て  
まちすくひ給はん心つくしなるをしははかくて心み  
給へとこ、にかく御かたはらにみき丁はかりへたて、  
見奉り給ことはりにやかすならぬ身にをよひなき御  
なからひになましひにゆるされ奉りてかひなき身のほ  
とをもすこし人とひと」(102オ)しくなるけちめもや  
御らんせらるゝとこそおもひ給へいみしうかうさへ侍

③か<sup>は</sup>とてにやと「かと」右肩朱合点中 ⑤宮<sup>は</sup>す所も「宮す  
所も阿 ⑧物し給て「物し給を阿 ⑨かくて「よくて阿 ⑭おも  
ひ給へ「思給へ阿

てふかき心さしをたに御らんせられすやなりなにと  
まりかたきみちをえゆきやるましくおもほえ給侍とか  
たみになき給てとみにもわたり給はす又は、北方のう  
らめしくおほしてなとかまつ見えんと思給ましきわれ  
はこ、ちもすこしれいならす物心ほそきおりにはあま  
たの中にまつとりわきてゆかしくたのもしくこそおほ  
え給へかういとおほつかなきにわたり給はぬ事とうら  
み給へはこれもことはり」(102ウ)なれは人よりさき  
なるけちめにやとりわきておほしなひたるをいまにな  
をわか／＼しくおほしまとはしたりしはしもみぬはく  
るしき事にし給は心ちのかきりにおほゆる折しもみえ  
奉らさらんはつみふかくいふせかるへしいまはとたの  
み(1220)なくきこしめさはいとしのひてわたり給て  
御らんせよかならすたいめたまはらんあやしくたゆく

②給侍と「給侍し阿 ⑥たのもしくこそ「たのもしくこそ阿  
⑦おほつかなきに「おほつかなき阿 ⑨おほしなひたるを「お  
ほしならひたるを阿 ⑪し給は「し給へは阿

おろかなるほん上にてことにふれておろかなるさまに  
おほさるゝこともありつらんこそくやしく侍れかゝる  
いのちのほとをしらすてゆくすゑ」(103才) なかくの  
み思侍けるよとてなくくわたり給ぬ宮はとまりてい  
ふかたなくおほしこかれたり大とのにまちうけ聞え給  
てまたよろつにさはき給さるはいたくいまおとろく  
しき御心ちのさまにもあらず月ころ物まいらさりける  
かいとゝはかなきくた物なとたにふれたまはすやう  
く物にひきいるゝやうにみえ給さるは時のいふそく  
に物し給へは世中におしみあたらしかりて御とふらひ  
にまいり給はぬ人なし内よりも院よりも御つかひたひ  
く給ていみしうおしみおほ」(103才) いたるにつけて  
もいとゝしきおやたちの御心のみまとふ六条院にもい  
とくちおしきわさなりとおほしおとろきて御とふらひ

③ なかくのみ―近くのみ阿 ⑧ くた物なとたにふれたまはす―  
くた物なとにふれ給はすや阿 ⑩ 世中に―世の中に阿

たひくねんころにちゝおとゝにも聞え給大將はまし  
ていとよき御中なればけちかく物し給てなけきありき  
給御賀も廿五日<sup>三四</sup>になりにけりかゝるときやんことな  
き上達部のおもくわつらひ給におやはらからのあま  
(1221)たの人くゝさるたかきなからひのなけきほれ給  
へるころをひなれは物すさましきやうなれとつきく  
にとゝこほりつる事たにあ」(104才) るをさてやむま  
しき事なるとていかてかおほしとまらんとひめ宮の御  
心中をそいとおしく思きこえさせ給けるれいの五十寺  
のみすきやう又かのおはします御寺にも摩訶毘盧遮那  
の

③ 廿五日<sup>三四</sup>に―四五日阿 ⑦ やむましき事なるとて―やむましき  
事なりとて阿

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、



# 解 説

ここに中京大本若菜上巻及び若菜下巻を翻刻したので、両巻についての簡単な解説を加えておく。書誌的説明<sup>(1)</sup>については、『中京大学図書館蔵図書善本解題』などを参照願いたい。この中京大本は、若菜上下巻と「橋姫・総角・早蕨」を加えた五巻五冊本であるが、麦生本・阿里莫本と同系統の本文でありその存在は貴重である。

中京大本の若菜上下巻の本文の特質の一端については拙論<sup>(2)</sup>でも述べたが、阿里莫本（若菜上下とも麦生本は欠巻）との異同から明らかになった点で、主に校合についての在り方を示す例を次にあげる。詳しくは次号で述べたい。

一、上下巻ともに、左は引歌、右は故事の該当する部分を指摘する朱の合点がかなりなされている。

一、中京大本では、朱墨の見せ消ちがあり、記号も「・」、「:」、「ヒ」など統一されていない、また補入に

ついても「○」のあるものとなないものとが混在しており、伊井春樹氏<sup>(3)</sup>が述べられたように幾度もの後筆によるものと見られる。さらに、青表紙本による何度もの校合書き入れも見られるがこれも後筆であろう。なお校合書き入れの多くはきわめて部分的な一語か二語のことが多い。たとえば、（校異は『源氏物語大成』、括弧内の数字も。中京大本も同様に丁数表裏を示す、以下も同様）

①阿 女君は かはかり ならん

中 女君<sup>さ</sup>は かはかり ならん （上53オ）

青 女君 さはかり ならんと （1073）

女君は（御）

女君は（は）補入（陽）

中京大本の、朱による補入「<sup>さ</sup>」、見せ消ち「<sup>ヒ</sup>かは」がなされる以前の本文は「女君はかはかりならん」であり、阿里莫本とのみ一致している。ところが校合後は、「女君さはかり」の部分は青表紙諸本

に一致し、「ならん」の部分は阿里莫本に一致している。これは青表紙本で「ならんと」の部分については校合されなかったために、どの本文とも一致しない「女君さはかりならん」という混合本文が作られてしまったのである。次も同様の手法で更に進んだ校合が行なわれている。

②阿まねひたらん

さる方に

中まねひたらん

人さるかたに(下35ウ)

青まねひえたらん

人さるかたか(1157)

他の諸本は青表紙本との異同はない。中京大本は

「人」の語を除くと、まったく阿里莫本に一致す

る。したがって「人」の語のみの校合書き入れを

行なったことが分かる。しかし校合後は「まねひ

たらん人さるかたに」という、どれにも一致しな

い本文となっている。しかしこのような手法に

よって、校合前は阿里莫本同様「まねひたらん」

で終止していた文が、「人」を入れることによっ

て青表紙本などのように、「まねひたらん人さるかたに」という一続きの文へと改変し得たのである。

一、次に阿里莫本の脱文かと考えられる箇所が若菜上下巻とに散見されることについてみてみる。

阿をくれ侍ぬる

××××

中をくれ侍ぬる

心さしの

青をくれたてまつり侍ぬる

心の

をくれたてまつりぬる(御)

心(御)

をくれたてまつり(補入)(陽)

心さしの(保)

をくれ侍ぬる(河・保)

阿××××

中ぬるさをそ

青ぬるさを

ぬるさは(三)

ぬるさを(保)

阿××××

××××

かな

中はつかしう 思給へぬる かな (上23ウ)  
青はつかしく 思給へらるゝ かな (1046)

はつかしう(国) 思ふ給へらるゝ(御陽三保)

はつかしく(保)

光源氏が朱雀院の病を見舞い、女三宮の後見を引き受ける場面での、光源氏の言の箇所である。ここで阿里莫本が「心さしの」以下「思給へぬる」までを欠いているのは一見して、「をくれ侍ぬる」の「ぬる」と「思給へぬる」の「ぬる」が同一の助動詞であるための目移りによる脱文をおかしたのではないかと推測される。一方中京大本では青表紙本など他本とわずかに「心の」が「心さしの」に、「ぬるさを」が「ぬるさをそ」、「思給へらるゝ」が「思給へぬる」などのわずかな語句の差異に見えるが、文意は青表紙本など他の諸本とは微妙に異なっている。青表紙本では、光源氏は己れの腑甲斐なさを「心のぬるさ」と嘆くことで、実は己れに先立って院が出家を実行したことに対する称

賛の気持ちを示すとともに、その気持ちが流露した自然な感情であることを「思給へらるゝ」の「らるゝ」で表現している。ところが中京大本では、青表紙本の「心の」に「さし」が、「ぬるさを」に「そ」が加わって「心さしのぬるさをそ」となっている。これは光源氏が己れの出家願望の決意自体の甘さをも鋭く問い正す語句である。しかも「思給ぬる」の「ぬる」によってその甘さを、今院の出家によって思い知ったから恥ずかしいという文意となる。しかしこれでは見舞いにきた目的から外れるばかりでなく、以後の女三宮降嫁とかかわらせる男性としての光源氏像との間に齟齬をきたすことになる。しかし一方では、このような人物像にまでかゝわる改変ともいえる語句を有している中京大本は、脱文以前の阿里莫本の姿が中京大本と同様であった可能性をも示唆しているのではないかと考える。

注

1 他に「中京大学図書館国書善本解題増補版」、岡偉久子氏「中京大学図書館蔵『源氏物語』について―麦生本・阿里莫本との関係―」（「中京大学図書館学紀要」第十三号、一九九二）。

2 「中京大学図書館蔵『源氏物語』（五冊本）について―若菜上巻の本文の特性―」（同紀要第十五号、一九九四）、「中京大学図書館蔵『源氏物語』若菜下の本文について―女三宮の造形をめぐって―」（「解釈学」十一、平六・六）、伊井春樹氏は五冊本全体にわたって述べておられる（「中京大学図書館蔵『源氏物語』本文の性格」（同紀要第十三号、一九九二）<sup>4</sup>）。

3 前掲注（2）伊井氏論文。

4 しかし阿里莫本は全体的にこのような例が多く、この箇所も一行としては文字数が少ないので、なお後考したい。